
未来への道筋

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来への道筋

【Nコード】

N3389X

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

隕石群の落下によってその傷跡を残した地球。経済や社会的な混乱を多少残っているが、それでもかつての平穏を取り戻そうとしていた。

隕石の落下によって、人々の間に異能を持つもの通称『異端者』と呼ばれる存在が現れ始めていた。

ある日、アメリカから帰国した蒼野優也は父親の連絡を受け異端者を管理育成する学園に通うことになった。

出会う人々、巻き起こる事件。その中で彼は己に足りないものを見つけることはできるのか？

1話「編入生」

辿り着いたときには既に手遅れだった。

凄まじい音をあげて舞い踊る紅い業火。それが家中を埋め尽くしていた。

見慣れた光景は既にそこにはなく、あるのはただ視界を染める紅くれないの炎と焦げた黒だけ。

そして、少年の目の前にはある物が転がっていた。

数は二つ。どちらも黒色で少年よりも大きく、手を持ち足を持ち顔を持つている。

死体だ。黒焦げた死体が二つ少年の目前に転がっていたのだ。

死体は既に誰か判別がつかなくらい黒焦げていたが、少年には誰なのかおおよその見当がついていた。少年の幼馴染の両親だ。

「どっして……」

疑問の聲が自然と口の中から漏れた。

どうしてこうなったのか、わからない。

どこにでもいる仲のいい家族。少なくとも少年はそう思っていた。だからこそ、何故こんなことになってしまったのか少年には理解出来ない。

そんな彼の疑問に死体の傍に立つ相手が答える。

「お前なんて俺たちの娘じゃないだつて……酷いと思わない？　この人たち私の力を偶然見て、そう言ったのよ」

答えを返した主は少女だった。可愛らしい女の子、少年の幼馴染だ。明るく、積極的な性格でいつも少年を引っ張ってきた。

少年が己の力を最初に話したのも彼女だ。以来、あの力と少女の力は二人だけの秘密だった。

けれども、今の彼女にそんな面影はない。瞳に光はなく、顔はこの状況に似合わぬ笑みを浮かべている。

「確かにこの人たちは異端者を気持ち悪いとか、いろいろ酷い事を言っただのは覚えてる。でも、実の娘にこんなことをするほど嫌ってたとは私も思わなかったな」

そう言って少女、少年の幼馴染は己の左腕を見せびらかした。

それを見て少年は目を見開く。彼女の左腕は有り得ない方向に曲がっていたのだ。

「ゴルフクラブでフルスイングよ。おかげで左腕はこんな調子。まあ、一番酷いのはそれだけで他はましかな」

笑みを消さぬまま話を続ける少女。

嘘だ。思わず少年はそう叫ぼうとした。けれども、恐怖に怯える少年の心は相手を刺激することを警戒し、下手な言葉を紡ぐことを許さない。

少年の瞳に映る少女の姿、それはひどい有様だった。体の至る所にある紫色の跡。頭から垂れるおびただしい血液。先の言葉と合わせれば、何があったのか皆すぐに理解するだろう。

「二人共、殴ったり蹴ったり……ねえ、優也。私、どうしてこんな目に合ったんだろう？ 私、何か悪いことした？」

少年に向けて問う少女。
優也と呼ばれた少年はそれに答えることができない。

「やられている間、痛みやら苦しさが胸の中に溢れ出してね。もうこんな嫌だ。この人達嫌いだって思ったの。そしたら二人共燃えちゃった」

返事がなかったことなど気にもせず、少女は言葉を続ける。

火の手は未だ家を燃やし続けている。本来なら二人共この家から出ないといけないのだが、雰囲気飲まれ少年はそれを実行することができないでいた。

「二人が燃えたらさ。今までであった痛みや苦しさがすっと消えて楽になっちゃった」

ニンマリと口の端を緩める少女。それを見て少年は少女を悪魔と重ねてしまう。

「これからどうしようっか。なんにも考えてないや。正直に言うてどうでもよくなっちゃった」

クルリと身を回す少女。まるでこの炎の中を遊び場と思っているかのようだ。

「ねえ、優也。この世界に願いが叶う場所なんてあると思う?」
「え?」

いきなり場違いな話の内容に思わずそんな声が漏れてしまった。

「私の願いわね。私を受け入れてくれる居場所がほしいの。こんな

私を見ても殴らない人がいる場所。こんな私に優しくしてくれる人がいる場所。こんな私と一緒にいてくれる人がいる場所。それが私の願い」

無邪気だけど、どこか切実な声。それは彼女の願望だったのかもしれない。

「……そうね。折角だし探してみようかな。私の願いが叶う場所を」
そんな独り言を呟く少女。そうして彼女は少年のほうを見る。

「ねえ、優也も一緒にそれを探しにいかない？ きつと楽しいよ」

そう言って手を差し伸べてくる少女。

一方の少年は少し躊躇いを覚えてしまった。

このまま放っておけば彼女は一人ぼっちになってしまっただろう。けれども、その手を掴むのが正しいとは何故か思えなかった。

「……優也？」

中々掴み返してくれない少年に少女が疑問を覚えた。そのときだった。

「大丈夫か！！」

突然、少年の後ろから声が聞こえた。

その声に少年が振り返ると、そこには男性の姿があった。顔には見覚えがある。確か近所に住んでいるおじさんだ。

「待っている。すぐに助けてやる」

男性は少年と少女の姿を認めると、二人を助けだそうとさらに炎の中へと入っていきこうとする。けれども……

「邪魔」

その一言と共に少女の体から炎の尾が伸び、それが男性の体に巻き付いた。

「な!？」

「や、やめてよ!！」

驚く男性と少年。

少年は慌てて少女のほうへと振り返る。けれども、生気のない瞳を男性に向けたままだ。

「あなたはいらぬ。だから、消えて」

冷淡に告げる終わりの言葉。直後、巻きつかれた男性の体が炎に包まれた。

言葉にならない叫びをあげる男性。だが、それもすぐに炎に飲みれ消えてしまう。後に残ったのは面影もない黒い塊のみ。

「あ、ああ……」

見知った顔が少女の手によって殺される様を見てしまった少年は無意識に少女から後ずさってしまふ。

今、彼の心の内にあるのは恐怖だ。少年には目の前にいる少女がもはや小さい時から知っている幼馴染には見えなかった。魔女、そ

う物語で見た怖い魔女のように見えた。

「優也は怖がらなくていいのよ。ほら」

少女はそんな彼の内心に気がついてないのか、先程と同じ無邪気な表情で再び手を差し出してくる。

だが、恐怖に振るえる少年はその手を取ることができない。

「……どうして怖がるの？」

中々、手をとってくれない少年に不思議に思った少女が疑問を口にする。

「怖がる必要なんてないじゃない。だって、優也だって私と同じなんだから……」

そう言って笑みを見せて少年に近づく少女。

だが少年からすれば、それは恐怖の増大にしかなかった。

最早、我慢の限界だった。

少年は後ろへと振り返り走りだす。炎があるとか関係ない。ともかくここから離れたかった。少年は少女から逃げ出したのだ。

そうして彼は入り口に辿り着いた。

ドアを開け外へと出る最中、少年は視線を背後へと向ける。

視線の先、そこには呆然と立ち尽くす少女の姿があった。差し出された右腕を掴む者はもはやおらず、その手はただ宙を彷徨っている。顔には驚愕という感情が浮かんでおり、見開かれた瞳はただま

っすぐに少年へと向けられていた。

一瞬、抱く罪悪感。だが、それは少年を足止めるほどの力はなかった。

そのまま、少年は家の外へと飛び出した。

その後……

家から飛び出した少年は付近に集まっていた近所の人たちの手によって保護。気を失ってしまった彼はそのまま病院へと運ばれていた。

一方の少女は少年から少し遅れて家から出てくると、まず手始めに目に映った人々を焼き尽くした。

そのまま少女は暴走。手近な人々を殺し続け、最終的に事態解決のために投入された機動隊によって射殺されるという最後を迎えた。

少年は変えることができなかった……結末を知っていたにも関わらず……

飛行機のエンジン音が空港内を駆け巡る。

案内を告げるアナウンス。人々の行きかう足音や話し声。そして

設置されているモニターから漏れてくる音。

それらが重なりあって、慌ただしさという雰囲気を作り出す。

そんな空港の中に一人の少年の姿があった。

「もしもし、父さん？　今、空港に着いた所。やっぱり飛行機に乗るのは疲れるな」

蒼野 優也あおの ゆいと言う名前を持つ少年は携帯電話を左手にスーツケースを右手に持ちながら、空港内を歩いていた。

彼が目指しているのは空港の出口。目的はもちろん、家に帰るためだ。

つい数時間ほど前まで、彼はアメリカで生活をしていた。結構な期間いたので故郷の日本に帰るのは久しぶりとなる。

「アメリカでの成果？　俺的にはいい刺激になったな」

父親から成果を尋ねられ、優也は正直な感想を口にする。笑みも混じっていることから悪くない成果だったのだろう。

周囲の人々は時折、彼の声に反応して優也のほうを見る。が、携帯電話で話をしている優也の姿を見つけると途端に興味を失ったのか視線を元のほうへと戻した。

そんな周りを気にすることなく優也は電話を続ける。

「わかってる。これで満足している訳じゃないから」

どうやら忠告を言われたようだ。いきなり笑みが消え普通の顔に

戻った。けれども、次の瞬間には大きな頷きと共に返事を返し、空港の外へと視線を向ける。

窓の外には青い空と白い雲が広がっていた。雲は広い空の中にポツンと漂っており、さながら広大な湖を渡る白い小舟のように見える。

「……あれから、4年か。あつという間だったな」

ふと、そんな呟きが優也の口から漏れた。

「……ねえ、父さん。あれから俺は強くなったのかな？」

電話の向こうからその返事が返ってくる。その返事に優也は苦笑してしまった。

「それは酷くないか？」

すると、さらにいろいろ言われたらしい。少しの間、優也の顔が嫌そうな表情になっていた。

「わかったわかったって……そこから先は家に帰ってからということで……」

とりあえず、そう言って話を終わらせよつとする優也。

だが、次の瞬間、その彼の顔が怪訝な顔つきに変わった。

「え？ 何？ どういうこと？ 帰ってこなくていいって」

思わず鋭い口調で問い掛ける優也。

そうこうしているうちに、出口が見えてきた。出口の向こうにはバス乗り場が見えている。あのバスに乗って駅にいけば後は電車を乗り継ぐだけだ。そうすれば彼は家に帰れる。その筈だった。

『ああ実はな、お前は私立神王学園に編入することになっている。だから、家ではなくそちらへ向かってほしい』

「はあ！？ 学園に編入！？」

父親の口から出てきた予想外の言葉に、思わず優也は大きな声を出して驚いた。

その瞬間、周囲の人々の視線が一斉に彼の身に突き刺さる。

「あ……」

数十人という人の視線を浴びてしまい、思わず固まってしまふ優也。人々は優也を見て特になんでもないを確かめると、すぐに視線を外していく。

やがて、視線がなくなったのを肌で感じた優也はホッと息を吐き辺りを見回した。

そうして誰も自分を見ていないことを確かめると、彼は携帯電話へと意識を向け小声で先ほどの話の続きを始めることにしたのだった。

「ちよ、ちよつと、待った。確かに本来なら俺は高校生だ。だけど、今は……っというか第一、既に俺は義務は果たしている。もう学園に通う必要はないはずだ」

『だから、一人前だとそう言いたいのか？ ふざけるな。お前などまだまだ半人前だ。お前を学園に通わせるのはお前に知識や力以外のことを学ばせるためだ』

その返事に優也はこれ以上話を聞きたくないという表情を隠そうともせずに浮かべた。

『それと荷物は既に送ってある』

「知識や力以外のことを学ばせるためだって言われてもな……ってか、もう荷物送ったって俺に拒否権なしかよ！！ というか編入試験とかはどうなってるんだ？」

声を抑えてまま電話の向こうにいる父親に怒鳴る優也。彼の疑問はすぐに返ってきた。

『あそこは武藤さんが理事長が務めている。事情を話して彼に協力を仰いだ』

それを聞いて優也は嘆息する。

「……いいのかよ。それ……はあ、わかった。とりあえず行ってくる。じゃあ、向こうに着いたら連絡するから」

『わかった。気をつけて行ってこい』

そうして優也は携帯電話の通話を切る。切った後、彼は大きなため息を吐いた。

「父さんもなに考えてるんだか……」

正直に言えば呆れていた。だが、決まってしまった以上行くしか

ない。自分の預かり知らぬところで決まったという理由でサボるほど、彼は豪胆な性格ではないのだ。

そうして優也は携帯電話をポケットに戻していく。その最中、彼は父親から聞いた学園の名前を思い返したのだった。

「……………私立神王学園……………か」

今から20年前の日本時間2060年7月6日。それが世界が変わる始まりの日だった。

その日、地球に隕石群が落ちてきたのだ。

事前に観測されていた段階では全て大気圏で燃え尽きると予想されていたそれらは、燃え尽きることなく地球に次々と落下。各地に被害をもたらした。

世界中でパニックと混乱が起こり世界は混沌となった。

為政者を失った国もあった。この混乱に乗じて侵略をしてくる非道な国もあった。

そんな状況も数年経てばやがて収まり、世界は再び平和な様相に戻りつつあった。ただ一つのことを除いて……………

その頃になって世界中のあちこちで不思議な現象を起こす人間が

何人も報告され始めた。

炎の玉を操る者、触れたものを凍らせる者。現象は様々だが、普通に考えて信じられない現象ばかりだ。

後の研究で隕石の中にあつた特殊な物質が人の体内に取り込まれたことが原因だと判明。以降、そんな異能を持った人々を異端者いたんしゃと呼び。各国は国の力として異端者の確保と研究を急務とするのだつた……

日本では彼らの育成や研究のために異端者と判明した者、もしくは目覚めた者は異端者専用の教育機関に通うことが義務付けられている。

理由としては危険な力である異能を制御する術すべやその心構えを身につけさせるためだ。異能の力というのは取り上げることのできない拳銃のようなもの。故に正しい使い方を教えなければ他の人間や自分を傷つける可能性も十分ありえる。

そんな事態を起こさないようにするために、専用の学園に通い術を学んでもらおうという訳だ。

学生年代の子たちのために、中学、高校といった授業も受けられるようになっていし、様々な授業科目も用意されている。

学生年代の子たちは教育課程で混ぜているため基本的に卒業までが期間となる。ちなみに仕事のある大人の場合、土日通いで半年ほどの期間だ。

異端者専用の学園は全国各所に存在している。優也の咳いた私立神王学園もその一つであつた。

「で、バス停はどこなんだ？」

改札を出てすぐに優也はバス停を探し始めた。

しかし、右を見ても左を見ても人、人、人……駅内は人で溢れていた。

「……バス停はあつちか」

どうにか天井に吊り下げられている案内を頼りに優也は道を進むが、人が多いせいで何度もぶつかってしまふ。

「本当に人が多いな。さすがは今日日本で有名な都市と言ったところか」

その事実にも優也は呆れ返るしかなかった。

西海市は近年誕生した人工島の都市だ。

企業や研究都市を積極的に誘致し、様々な面でバックアップ。結果、それらの企業や研究施設が大成功を収めたことで、一躍有名となった。

その後、拡張工事が行われると大小様々な企業や研究施設が殺到。おかげで国内最大の研究地帯として有名だ。

さらにその後の拡張工事で居住区やショッピングモールなどの買い物施設の集まった区画が誕生。通勤者を始め多くの人々がここへと移り住んだ。

先の私立神王学園もここに居を構えている。
学園は異端者の教育と同時に研究も行なっているためだ。その点から考えれば西海市に学園が存在してもおかしくはない。

そんな事実を思い出している内に優也はバス停へと辿り着く。しかし、ここで新たな問題が発生した。

バス停が数えるだけで9カ所以上もあるのだ。恐らく方角や道順などが違うのだろう。ただ、どれに乗れば私立神王学園に行けるのかがわからない。

とりあえず近くにあった地図へと足を運ぶことにした。

「現在位置がここで私立神王学園はこのバスか……で、問題のバスはどの乗り場だ？」

どうやら一つ一つ、乗り場を確認していく必要があるようだ。その事実には彼は思わずため息を漏らしてしまう。

そんな時だ。

「あの……何かお困りですか？」

彼の背後から女性の声の尋ねてくる声が聞こえてきた。

その声に優也は振り返る。

すると、そこには綺麗な少女が立っていた。

腰までまっすぐ伸びた長い艶やかな髪。整った顔立ち。優しそうな青い瞳。全体的に華奢な体付きなのに、服装が描くボディライン

は綺麗な曲線を描いている。

そんな彼女に優也は思わず見とれてしまっていた。

「あの……どうかされましたか？」

返事がないことを不振に思ったのか、再び少女が掛けてくる。その声に優也はすぐさま我に返った。

「あ、いえ、なんでもありません」

慌てて手を振る優也。見惚れていたなんて正直に言えるはずがない。

「そうですか。それでどうかしたんですか？」

幸い、彼女はあまり深く追求してこず本題へと話を戻した。そのことに優也は内心安堵を得る。

「私立神王学園へ行くバス停がどれなのかと思って探してるところだったんですけど……」

「私立神王学園ですか？ でしたらあそこにある乗り場のバス停です」

そう言って彼女はそのバス停を指差す。

「ありがとうございます」

「あの興味本意ですいません。学園にはどのような「用件で？」」

優也がお礼を言うと少女は少し迷った後、恐る恐るといった様子

でそんなことを訊いてきた。

「え？ ああ、編入の手続きに。でもどうして？」

隠すことでもないかなと思いき直に答える。そのついでに質問の意図を聞くのも忘れない。

「あ、実は私、その学園に通ってるんです」

「ああ、在校生の方でしたか」

確かに同じ年ぐらいの子が学園に行こうとしているのなら、興味を持つかもしれない。そう考えて優也は納得する。

「あ、すみません。私、白井沙^{しらい さやか} 耶香と申します」

「蒼野 優也だ。よろしく」

そうして二人は挨拶を交わし合った。

丁度その時だ。沙耶香の教えてくれたバス停にバスが到着した。

「それじゃあ、そのうち学園で……」

「はい。是非」

バスに乗り込むため優也そう別れの挨拶を切り出し、それに沙耶香が応える。

バスに乗り込み窓を見ると、沙耶香まだそこに立っていた。どうやらこのままバスが出るまで見送るつもりのようなのだ。

やがて、バスが出発する。それを見て沙耶香が手を振ってきた。すかさず優也も手を振り返す。

そうして彼女に見送られながら、優也を乗せたバスは己の定めた

目的地へと向けて出発したのだった。

ノック音が部屋に響く。

「入ってくれ」

「失礼します」

その挨拶と共にドアが開き、優也が部屋に入ってきた。

優也が今いるのは学園の理事長室だ。

編入の手続きに学園にやってきた優也がその旨を受付に伝えると、何故か理事長室へ来るように言われた。

疑問は持ったが、ともかく行くしかない。

そうして今に至るのである。

ドアを閉じて、優也は部屋を見渡す。

部屋は質素ながらもどこか趣きのある雰囲気醸し出していた。

紅いカーペットに白のテーブルと黒のソファ。本棚もある。

そして、窓側には黒の机と椅子があり、そこにはこの場所でもっとも偉い人物が座って優也を見ていた。

「よく来たね」

そう言って声を掛けてきたのは白髪混じりの男性だった。

武藤 玄冬。この私立神王学園の理事長を務めている男だ。

とりあえず優也は上着を脱ぐと、ドアの傍にあったハンガーに立て掛けることにした。

「そこに座っていてくれ」

玄冬は黒のソファアームを指差すと自分は机から立ち上がり、部屋の隅に向かって歩いて行く。

優也がソファアームに座ると、程なくしてティーポットとカップを載せたお盆を持ってきた彼が向かいのソファアームに着いた。

「紅茶。飲むかい？」

「いただきます」

優也がそう返すと、玄冬は彼の前にカップを置きそこに紅茶を注いだ。香りの良い匂いが漂い、優也の鼻を楽しませる。

注がれたカップを手に取り優也は紅茶を口に運ぶ。

「……美味しいです」

素直に優也はそんな感想を返した。

「そうか。それは良かった。ところで元治君は元気かね？」

「電話越しには元気そうでした」

空港での父の声を思い返す。いつも通りの声色だった。間違いない。

彼の返事に疑問を持ったのか玄冬が首を傾げる。

「ん？ 彼と直接会ってないのかい？」

「空港着いて連絡したら、ここに編入だと言われたのでまっすぐ来

ました」

それに優也は苦笑交じりに答えた。

「なるほどな。全くあいつも……」

呆れた顔を浮かべてため息を吐く玄冬。

先の会話からもわかる通り、優也の父、元治と彼は知り合いだ。聞いた話では父の元上司らしい。

その辺の事情もあって、優也は彼と顔見知りだ。ただ、彼が今どこでなにをしているかは父の編入の話を聞くまで忘れていたが……

「まあ、気にしないでください」

「君のほうは元気そうだな。アメリカはどうだったんだ？」

教えたのは父だろうか。玄冬が興味津々な表情で訊いてきた。

まあ、彼なら教えても問題ないだろう。そう考えて優也は問いに答えることにした。

「ええ、いろいろあって自分的にはいい刺激となりました」

「そうかそうか」

その報告を聞いて玄冬は嬉しそうな顔を浮かべる。

「君も大変だな。そんな年齢で」

「玄冬さん」

同情の眼差しで何かを言おうとする玄冬。だが優也がその途中で口を開き、彼の言葉を止めた。

「この道は俺が決心し望んで選んだことです。だから、心配しないでください」

静かに告げられる言葉。不思議とその言葉に玄冬は強い決心を感じることができた。

「……そうだな。いらん同情だったか」

彼の言葉を聞いて、玄冬はそう言つとソファーにもたれかかる。

「では、これからの話をしようか。優也君」

「はい。理事長」

知り合いの談笑は終わりを迎え、これから始まるのは理事長と生徒の話し合い。

故に優也は理事長と呼び変えた。

「では、優也君。君は明日の4月1日月曜日から本学園に通うことになる」

「はい」

「君は未発現体ということになっている。それでよろしいかな？」

「はい」

先程よりも強い返事。その返事に玄冬は頷く。

未発現体とは異能を持っているのはわかっているが、それが発動できていない、もしくは何の能力かわからない異端者を指す言葉だ。異能を持っているかは体内にある発現因子の量で決まる。一定数以上あればほぼ間違いなく異能を持っていると過去のデータで証明

されているのだ。

発現因子の量は固定でなく環境や成長によって変化していく。そのため、成長途中でいきなり異能を持つたりするケースなんてよくある話だ。

「結構、書類に関しては既に君の両親と私で済ませているから君にしてもらうことない。寮で休んでもらって構わないよ。あ、寮の場所を教えたほうがいいかな」

そうして彼はメモを持ってくると、そこに寮への簡単な地図を書きそれを優也に手渡した。

「まあ、学園のすぐ傍なんだが、一応な」

「ありがとうございます」

礼を言ってメモを受け取る優也。

「それでは失礼します」

「ああ、私も久々に君と話せた楽しかったよ。またなにか機会があれば来たまえ」

「そのときが、理事長と生徒でないことを祈ってます」

そう返すと途端に玄冬が笑い出した。

「違うない」

「では……」

そうして優也は一礼。その後、理事長室を後にしたのだった。

寮には手間取ることなく辿り着いた。ちなみに学園は全寮制でかなりの数の寮が学園の周囲に存在している。この寮もその一つだ。

寮監のもとを訪れると話には既に通っていたらしく、教科書や制服など学園生活に必要な物をひと通り渡された。

それを持って優也は言われた部屋へと向かう。

「……ここだな」

部屋の番号を確認して鍵を開ける優也。

部屋の中は意外と綺麗だった。

ベッドとダンス、そして机と椅子。トイレやお風呂もあり、十分生活できるだけの物が寮室には揃っていた。

ただ、どういう訳かベッドの上には妙な物が置かれている。アタッシュケースだ。銀色のアタッシュケースがベッドの上に載っているのだ。

とりあえず制服はダンスに入れ、明日の時間割を確認して教科書やノート、筆記用具を先に通学鞆に入れておく。

それからスーツケースから着替えなどを取り出すと、それをダンスの中へと収めていった。

そしてそれらが完了すると、最後にベッドの上に置かれたアタッシュケースへと優也は手を伸ばした。

アタッシュケースには見覚えがあった。付けられているメモを見ると家から送られてきた物らしい。

開けてみると、中には予想通りの物が入っていた。先に荷物とし

て送ったがそれにしてはここに送られるのが早過ぎる。学園用に用意した別物だと優也は判断した。

ともかく、優也はそれを取り出してみる。全体的なカラーリングは灰色。尖った形状が特徴的で大きさは腕よりも少し大きいくらいだ。形状の途中には円柱状の突起物があり、そこは手で握るのに丁度いい大きさと長さになっていた。

優也はその部分を逆手で持つ。すると、それは手から肘までを覆うように彼の腕にピタリと張り付いた。

アタッシュケースの中身。それはトンファーだった。二つ一組のトンファーがアタッシュケースの中に綺麗に収まっていたのだ。

「まあ、確かに許可さえ貰えれば武器を持つのは許されてるらしいが……」

呆れ気味に優也は、両手に握ったそれを見つめていた。

異能によっては道具が必要なケースがある。

そのため、学園の審査さえ通ることができれば剣であろうと銃であろうと学園内に限っては使用が許可される。無論、人を傷つけないように最大限の配慮は為されていることが前提だ。

ただそれ以外でも非戦闘系の異能なら、それほど危険のない物であるなら武器持ちを許可されるケースもある。

理由としては己の身を守るためだ。

想像すればすぐにわかるだろうが、戦闘系と非戦闘系で戦いになれば戦闘系が有利なのは疑いようがない。

無論、そんな事態を避けるために学園にもいくつかのルールはある。けれども、ルールを無視して襲われる可能性もなくなる。故にそついった事態になった時、己の身を守るように多少の武器なら

許可されるという訳だ。

聞いた話だとスタンガンやスタン棒、警棒などが許されているらしい。

優也は未発現者として学園に登録されている。そのため武器が認められたのだろうが過去の例から考えてみても、よくこんな物が許可されたものだ。恐らくその辺は多少無茶をしたのだろう。

とはいえ、優也的には使い慣れたこちらのほうがありがたい。握ってみるといつもよりも軽い。恐らく様々な要因のせいでこの重量配分になってしまったのだろう。

だが、問題ない。多少違和感はあるが、この程度ならすぐに修正できるだろう。

とりあえずトンファーはアタツシケースに戻してタンスの方に置いておく。

そうしてから優也は家に電話して学園の寮に着いた旨を連絡した。父親の返事は『まあ、頑張るんだ』の一言だけ。

切れた電話を恨めしげに見た後、時間を見ると時間は18時頃を指していた。

夕食は寮へ行く道中、美味しそうなさぬきうどん屋を見つけたので既に済んでいる。そのことは寮監にも伝えていた。

寮には食堂が付いているらしく、寮監は夕食時に寮の子たちに紹介しようと考えていたらしい。

ただ、優也が夕食を済ませたことを知ると、『それなら明日まで隠そう』と笑みを浮かべてそんなことを言ってきた。

話によると優也の部屋の準備なども他の寮生に気付かれないように密かに一人でやっていたようだ。興味本位で理由を尋ねてみると『寮生たちを驚かせるため』と意地悪そうな笑みを浮かべてそんな言葉を返してきた。どうやらかなり茶目っ気のある人らしい。

そういうことなので後は風呂に入って寝るだけの状態だ。正直言
って暇である。

室内で暴れまわるわけにはいかない以上、稽古は無理。荷物の中
に暇潰しになりそうなものはない。

仕方なくベッドに横になって考え事をすることにした。

まず考えるのは学園の感想だ。

来てみて、すぐに思ったが大きな学園だなつと優也は感じた。

広大な敷地。そこに置かれた校庭、校舎、設備、そして研究施設

……

寮を始め、食事やインフラなども整えられており、恐らく学園生
活に必要なほとんどの物は学園内でどうにかすることが可能なはず
だ。

一瞬、箱庭という言葉が優也の頭に浮かぶ。ある意味、それは間
違いではない。

多少の違いはあるだろうが、全寮制であること、設備、インフラ
が整っている点などはこの異端者用の学園でも同じだという話だ。
恐らく未熟な異端者が、その力で一般人を極力傷つけることにな
いようにするための配慮だろう。とはいえ、表向きそんなことは公
表されておらず、バス停で会った彼女のように時たまは出掛けてい
るのが現実だ。

無理やり閉じ込めているとなれば、社会的な問題もある上、スト
レスで学生たちが暴動が起きる可能性もある。

ならば、なにも言わず無意識にそうなるように誘導するのがベス
トだろう。

それを卑怯だとは優也は思わない。

そうすることが最善であるなら、それは間違いではないだろう。

まあ、人が知れば眉をしかめたくなる内容ではあるかもしれないが、

優也的には十分許せる範囲だと考えている。

まあ、ひよっとしたらそっちの環境とかに慣れたせいなのかもしれないが……

そのことに苦笑しつつ、優也はさらに別のことを考える。

次に出てきたのは沙耶香と名乗った少女のことだった。

同い年のように見えたので、なにかの縁で会うかもしれない。ひよっとしたら同じクラスの可能性だって十分ありえる。

「学園に通っているということは彼女も異端者なんだよな……」

つついどんな異能を持っているのか考えてしまった。彼女の態度や反応を見ると、未発現者の線は低い。それなりに学園に通って未発現者なら、あそこまで明るく優しい子にはならないはずだ。

「っと、なに考えてんだか……」

自分で自分に呆れつつ優也はベッドから起き上がる。

風呂に入ってそろそろ寝ようと思ったのだ。飛行機に乗ったせい、体は結構疲れている。早めに寝るのもいいだろう。

明日からは学園生活だ。

「どんな日々を過ごすことになるのやら……」

その眩きと共に漏れ出た感情。それが嘆きではないのは確かだった……

1 話「編入生」終了

2話「編入。そして学園へ」

授業の始まりを告げる音が学園中に鳴り響いた。

生徒たちは慌てて教室に戻り、教師たちは教室に向かうために職員室から出てくる。

そんな中、優也は担任の教師に先導される形で廊下を歩いていた。担任の名前は沢尻さわじり理香りか。ショートボブの黒髪と茶色の瞳をしており、どこかしっかりした感じのある女性教師だ。

「あなたがこれから通うクラスは2 A。基本的に皆、いい子だからあまり自分のことを卑下しないで大丈夫なはずよ」
「そうですか」

歩きながら、これから入ることにクラスについて簡単に説明をする理香。

それに頷きながら優也は歩いていた。

「ただまあ、結構騒がしい人が多いから呆れるかもしれないけど」
「それぐらい、元気なほうがいいと思いますけど」
「……なんていうか、大人びた意見ね。まあ、ともかくそういうノリの子たちだから蒼野くんのことともすぐに受け入れてくれると思うわ」

今、廊下には優也たち以外に人の姿はない。そのため廊下には二人分の靴音が響きわたっていた。

「後は連絡事項だけど……学園内での喧嘩は禁止。一応自衛のため武器の許可は出されてるけど、だからって戦っていいって勘違い

したら駄目よ？」

「それはわかってます」

苦笑を浮かべながら、優也は応答を返す。

もとより、そんなつもりはない。下手に手を出せば大変なのは優也のほうなのだから、手を出すメリットなんてどこにもないのだ。

「よろしい。あ、あとあなたは未発現体だから、何かの異能かわかったらあつたらすぐに知らせてね」

「はい。わかりました」

「他に質問はある？」

その問いに優也は首を横に振った。

大体のことは理解できたし、特に気になることもない。それ故の応えだ。

「そう。じゃあ、手順だけど……まずは私が教室に入って編入生のお話をするから、蒼野君は教室前で待機。私が呼んだら入ってきてね」
「指示があるまで待機。了解しました」

そうこうしているうちに二人は目的の教室に辿り着いた。

ドアは一般的なスライド式。それはここまで来る道中、優也も何度目にもしていたので気づいてはいた。ただ、材質は木やプラスチックではなく、かなり頑丈そうな材質だ。大方、多少の異能で壊れないように設計されているのだろう。

出入り口の上には『2・A』という文字の書かれたプレートが入っている。どうやらここで間違いないらしい。

「それじゃあ、私が呼ぶまではドアの前で待機してね……あ、そうそう。その制服姿、結構似合ってるわよ」

そう言い残すと理香はドアを開け教室の中へと消えていった。彼女が教室に入ったことで先程まで騒がしかった教室がピタリと静まり返り、同時に号令の声が教室から聴こえてきた。

優也は改めて自分の服装を見下ろす。

私立神王学園の男子制服はブレザー。上着は白と青を基調した色合いで、ズボンは紺色になっている。シャツは白で首元からは赤色のネクタイが伸びているのが特徴だ。

学園に来る前、寮の鏡で見た優也自身の評価は『悪くない』というものだった。ただやはり他人から褒められるのは嬉しいもので、つつい口の端が緩んでしまう。

ドアの向こうでは理香が編入生の話をしているところだった。

彼女の発表にクラスの生徒たちは一斉にざわめく。

やがてドアが開き、理香が優也の名前を呼んだ。

呼ばれた優也が教室に入ると、途端に教室中の生徒の視線が彼に突き刺さる。

その視線に反応して優也は教室を見回した。

彼の視線の先、自分と同じ歳の学生たちが机に座り、優也のことをじっと見つめている。

男子と女子の数は大体同じくらいだろうか。皆、優也を見る視線に好奇の色が混じっていた。

そんな風に優也が見回していると、ふと教室の中に見知った顔がいることに気が付いた。

彼が見つめる先、そこには昨日バス停で会った少女が座っていたのだ。確か名前は白井 沙耶香だったと優也は記憶の隅から掘り起こす。

確かに在校生だとは言っていたし同じクラスなのではと優也

自身も期待はしていたが、まさか本当にそうなるとは思ってもみなかった。

そんな彼の視線に気が付いたのか沙耶香が笑みを返してくる。それに優也は微笑で応えようと、理香の案内に従い教卓の前に立った。

「それじゃあ、蒼野君。自己紹介をお願いね」

「はい」

そう答えた優也は改めて教室を見回すと、一旦軽く息を整える。そうして準備を整えると彼は閉じていた口を開くのだった。

「初めまして。蒼野 優也です。よろしく願いします」

簡素な挨拶をして頭を下げる優也。

最初はそれに対して静寂が返ってきたが、やがて誰かが拍手を送る。すると、それに釣られて他の人たちも拍手を送り始め教室中に多くの拍手の音が響き渡った。

「はい。それまでね。後、彼は未発現体だからいろいろと大変になると思うの。だから、皆しっかり彼を助けてね」

拍手を止めた上で補足する理香。それに生徒たちは元気な声で答えた。

「よろしい。それじゃあ、授業を始めるわよ。蒼野君の席はあそこの空席だから」

指差す先、見れば確かに空席がある。場所は窓側から2列目の一番奥。丁度、窓側にいる沙耶香の右隣の席だ。

「わかりました」

それに従い優也は席に座る。席に座る際に周りの生徒たちと簡単に挨拶を交わした。無論、その中には沙耶香も含まれている。ただ、今は授業が始まるということで互いに簡単な挨拶を交わすだけで済ませた。

そうして優也の新しい生活がスタートを切ったのだった。

そして次の休み時間……

当然のように、優也の周囲には人だかりができていた。

クラスの生徒は当然だが、中には見覚えのない生徒の姿まである。恐らく他のクラスの生徒たちだ。

その盛り上がりようについつい優也は内心でため息を吐いてしま
う。

「ねえねえ、前はどこにいたの？」

「わからないことがあったら聞いてね」

「好きな食べ物や好みの女の子とか語り合おうぜ」

「運動はできるのか？ なら、陸上部に興味はないか？」

「おうちはどここのほうなの？」

次々と飛んでくる質問の数々。答える前に新たな質問が飛んでく

るので、優也は答えることができず困ってしまっていた。

質問してくる生徒たちは興味津々に優也のことを眺めながら問いの言葉を放つばかりでそのことに気付いていない。

どうしたものかと優也が思っていたその時だ。左隣の席から救いの手が差し伸べられた。

「あの、皆さん。そんなに矢継ぎ早に質問をされても蒼野さんが答えられないと思うのですが」

その声に皆が一斉に優也の左隣の席を見る。

声を掛けたのは沙耶香だった。

「せめて、誰かが代表になって代表的な質問をしたほうがいいのではないのでしょうか？」

「確かにその通りだね。じゃあ、あたしがやるよ」

沙耶香の提案に同意したのは一人の女生徒だった。茶髪のショートヘアに茶色の瞳。活発そうな雰囲気を持っており、優也は彼女を見て男らしそうな性格だなと失礼ながらも思ってしまう。

「あたしは赤井^{あかい}綾香^{あやか}。よろしくな」

「ああ、よろしく」

「それでだ。皆はあたしが代表者になっても構わないか？」

挨拶を交わした後、そう言って綾香は辺りを見回した。彼を囲んでいた一同はそれを見て一斉に頷く。

その反応に綾香が満足気に頷くと、すぐさま彼女は質問を始めた。

「で、だ。まずは前はどこにいたのか教えてくれないか？」

「ちよっと前までアメリカのほうに行ってた」

優也の返事に綾香は目をぱちくりとさせる。

「アメリカ？ 留学でもしてたのか？」

「いや、そんなんじゃない。ちよっと、1年くらいの間、知り合いのところまで世話になってただけだ。勉強は個人的に教えてもらっていて学校とかには通ってなかった」

「そうなんだ。ってことは試験を受けて2年からでも問題ないと判断されたってことか」

「そうだな」

実際はそんな試験を受けてなどいないが、とりあえずそういうことにはしておく。

彼の答えに綾香だけでなく周囲の生徒たちも驚いたようだ。皆、目を丸くして優也のを見つめていた。

「じゃあ、学校生活は中学校以来ってことだな」

「そういうことだな」

頷く優也。そんな想定外の答えに周囲はどう反応すればいいか困ってしまっていた。

「で、他の質問は？」

このまま詰まっても仕方ないので、優也が綾香に続きを促す。

「あ、ああ……えーと、それじゃあ好きな食べ物とか」

少し悩んだ後、そう言って綾香は質問の続きを始めた。

「果物は大体いけるかな。一番好きなのは柑橘類だけど。趣味は本読みだな」

そんな調子で質疑応答は繰り返された。

綾香も代表ということで個人的な部分は我慢して、基本的な質問を繰り返してくる。その質問に優也が答える。そういうやり取りの繰り返しだ。

やがて聞くべきこともなくなり、質問時間が終了を迎えた。

「悪いな。質問攻めで」

「たぶん、こうなるんじゃないかと思ってから気にするな」

皆を代表して謝る綾香に優也はそう返す。

「まあ何にしても沙耶香のおかげで話が円滑に進んで良かったな」

「そ、そんな私はただ当たり前のことを言っただけです」

それを聞いて慌てる沙耶香。そんな彼女の反応に周囲の人間や優也が笑い出す。

「あ、そうだ。白井さん。昨日は本当に助かった」

「いえ、お気になさらずに。困っている人がいれば助けるのは当然のことですから」

そんな状況の中で優也は昨日の件についての礼を言った。

そんな彼の礼に沙耶香は謙遜する。

けれども、事情を知らない周囲の人達からすればそれは意味深な会話でもあった。

「え？ なにどういうこと？」

早速と言っべきか、生徒の一人が事情を訊ねてくる。

「いや、昨日バス停で困っていたら彼女が声を掛けてくれたんだ。おかげで無事学園に辿り着くことができたという訳だ」

特に隠すことでもないの、優也は正直に話すことにした。だが、彼の返事を聞いて他の生徒たちが意味深な顔を浮かべる。

「へえ。昨日のうちにね……」

「そうして今日、クラスメイトとして再会……」

「ゲームなら攻略可能ヒロインだな」

「むしろメインヒロインだな」

「えっと、つまりそれって運命の相手ってこと!？」

口々とそんな憶測を口にするクラスメイトたち。そんな彼らの反応に沙耶香は慌ててしまう。

「ちょ、ちょっと待ってください!!! どうしてそうなるんですか!?!」

そういうことに抵抗感のある彼女としては、そんなことを言われて少しだけパニックになってしまったらしい。

そんな彼女の反応に他の生徒たちの嫌疑をさらに深めてしまう。

「この反応……実は沙耶香も意識しているとか？」

「くそ!!! なんて……なんて羨ましいんだ!!!」

「俺もそんな運命にあってみて」

「運命の相手か。憧れるな」

「だから、違います!!」

一人助けもなしに必死に否定する沙耶香。だが、誰も彼女の話聞いていない様子はない。

「……確かに騒がしいな」

そんな中、状況についていけず傍観者となっていた優也はそんな眩きを漏らし苦笑するのだった。

そんな感じで始まった優也の学園生活初日だが、授業などは割りと順調に受けることができた。

最初のほうは周囲から心配されていたが、悩むことなく受け答えする様子を見て周囲も安心したようだ。

編入試験もなしにいきなり2年に放りこまれた優也としても勉強に関しては問題ないと考えていた。元々頭は悪くないし、なにより授業内容は既に習った範囲でもあったからだ。

そういう訳で優也は午前の授業を問題なくクリアしたのだった。

そうして昼休み。

「おーい、蒼野」

学食に行こうとする優也に声を掛ける人物がいた。振り返る優也。すると、そこには質問の際に代表者になっていた

少女が立っていた。

「確か赤井であってたか？」

「綾香でいいよ。その変わりあたしもあなたのことを下の名前で呼ばせてもらうから」

彼女の背後には女性が二人立っている。二人共値踏みするような視線で優也を眺めていた。

「あんたも学食組か？ それなら案内ついでに一緒に食わないか？」

「まあ、そのつもりだ。と、言っても今回だけだけど」

その返答に彼女たち三人は首を捻る。

「どういう意味だ？」

「今朝、寮監に聞いてみたら弁当を作るために食堂の厨房を使うのは構わないって聞いたからな。材料も安めに売ってくれみたいだし、次からは昼飯はそうしようかなって思ってたな」

ただ、今朝はさすがに無理があったし、一度くらいは学食を利用してみたいという思いがなかった訳でもない。

「優也って料理できるのか？」

彼の話聞いて綾香が意外そうな顔を浮かべた。それは他の二人も同様だ。

「まあ、あつちで日本料理が恋しくなったら自分で作ったりしたからな」

「おお、そうなのか」

そんな優也の返答に感心する三人。彼女たちの反応を見て優也はこそばゆい思いに駆られてしまう。

「しかし、ってことは優也も沙耶香と同じ弁当組ってことか」
「白井も弁当組なのか？」

思わず出てきた疑問の言葉。その言葉と同時に優也は左隣へと視線を向ける。

「はい？」

いきなり視線を向けられた沙耶香は驚いた声を漏らしながら、優也の方を見つめ返した。

弁当を取り出し開けようとしたところだったようで、手が蓋の上に乗っている。

「優也もあんたと同じで弁当組だって話」

「ああ、そういうことですか」

そこに綾香が補足を加え、おかげで沙耶香は優也の言葉の意味を理解した。

「丁度いいや、沙耶香も弁当箱持って一緒に学食で食べない？」
「別に構いませんけど」

その返事に綾香は満足気に頷く。

「じゃあ、行こうぜ。ご両人」

そう言つて友人を引き連れ学食に向かう綾香。
そんな彼女を見て優也は肩をすくめると、彼女の後に付いて行く
と歩き始める。

しかし

「あ、そつだ。蒼野さん」

突然、なにか思い出したのか沙耶香が優也に声を掛けてきた。お
かげで優也の足が止まってしまつてしまう。

「なんだ？」

振り返る優也。すると、声を掛けてきた沙耶香は顔を緩ませ、次
のようなことを言つてきた。

「名前、呼びづらいのであれば下の名前で呼んでも構いませんので。
用件はそれだけです」

その見事な仕草に優也は思わずドキツとしてしまつて。
顔全体が熱い。顔が赤くなっている感覚がある。だが、優也はあ
えてそれを無視し隠すように彼女に返答を返す。

「え〜と、じゃあ、お言葉に甘えて……あ、後、俺のほうも呼びた
かったら下の名前で呼んで構わないから」

「あ、私は大丈夫ですので、お気になさらずに」

「おーい。二人共早く〜」

そこへ、中々来ない二人に気が付いた綾香が大きな声で急かして
きた。

彼女の呼び掛けに優也と沙耶香は顔を見合わせる。

「それじゃあ、行くか沙耶香」

「はい。蒼野さん」

そうして優也たちは綾香たちの後を急いで追いかけたのであった。

学食はかなり広かった。

「なんとというか……ショッピングモールのような感じだな」

学食を見渡し呆れた声を漏らす優也。

彼の言葉の通り、学食はまさにそんな雰囲気のところだった。

広い空間にあちこち大量に置かれたテーブル席やベンチ。四人用や六人用、果ては十人以上用の席まで置かれている。

席のある場所も普通のアスファルトの上や緑地化された草原の上、噴水の傍に加えテラスや二階席と様々な場所に配置されていた。

学食もファーストフードやうどん屋、さらにはアイスクリーム屋と各種店舗が取り揃えられており、もはや学食ではなく優也の言う通りショッピングモールの域だ。

「凄いだろ。弁当組もここで食べてる奴が結構いるんだぜ」

傲慢するような口調で綾香が説明をしてくる。

「まあ、確かに凄いが……やり過ぎだろ」

なにも学食にここまで……とは思いが、昨日の夜考えていた事情
辺りも絡んでいるのだろう。

ため息だけ吐いてそれ以上はなにも言わない。

ともかく五人は適当な席を確保する。

「沙耶香。席頼む。あたしたちは買いにいつてくるから
「はい」

そうして沙耶香を残して他の四人は昼食を買いに出かけたのだっ
た。

彼らが戻ってきたのはそれから少し経ってからだった。皆、それ
ぞれ思い思いの昼食を持っている。

「優也は親子丼か」

彼が持つお盆を見て綾香がそう呟いた。その綾香たちはファース
トフードを選んだようだ。三人ともお盆の上にハンバーガーとポト
テとドリンクが置かれていた。

ともかく早速、五人は昼食を食べ始める。

「授業の感想はどうだった？ 割りとしつかり付いていけてたみたいけど」

その最中、綾香が優也に授業の感想を尋ねてきた。

「ああ、問題ない」

きっぱりとそう答える優也。その様子に彼女たちはどこかほっとした表情を浮かべる。

「そういえば綾香と沙耶香はわかるんだが、そっちの二人の名前を聞いてもいいか？ クラスメイトなのはわかるんだが」

「っと、そうだったな。浅田 恵美と雪村 早苗だ」

優也の指摘でそのことに気がついた綾香。早速、彼女は自分の連れを紹介することにした。

「よろしくね」

「私達も下の名前で呼んでもいいから」

綾香に紹介され、二人の少女たちが優也に挨拶をしてくる。

「よろしく。そういえば皆はどのぐらい学園に通ってるんだ？」

その挨拶に返事を返したところで、ふとそんな疑問が沸き、思い切って優也はその疑問を彼女たちに尋ねてみることにした。

「あたしは4年通って今年で5年目だな」

「私も」

「私も」

「私は今年で7年目ですね」

綾香、恵美、早苗、沙耶香の順で彼の疑問に答えていく4人。
その返答に優也は意外という顔を浮かべる。

「全員、とりあえず義務は果たしてるのか。外に出ようとは思わなかったのか？」

さらに問い掛ける優也。尋ねられた相手は顔を見合わせ、こう答えてきた。

「全く思わなかったね」

「学園内のほうが上の学校に行くのが楽しね」

「おまけにいろいろと科目もあるから、外の学校に行くメリットがないかな」

「第一、学園の外じゃ気軽に異能が使えないしねー」

「ねー。捕まって注意されたり、最悪犯罪者になることもあるし…」

…そういうのって何か息苦しいじゃん」

口々に出てくる理由。それを聞いて思わず優也は納得してしまっ
た。

なんてことはない。ただ単に外の学校に行く意味を感じなかった
というだけだ。

外に出ることに不便を感じるなら、当然今のままを選ぶ人が多数
だろう。少なくとも優也が同じ立場ならそうするに違いない。

ただ、沙耶香は少し違った理由を持っていたようだ。

「私はここで異能の力を鍛えたいと思ってるので残ってます」

この答えには綾香たちも驚いたようだ。

おお、と声を漏らす。

「真面目だな」

「さっすが」

そう言っただけで彼女たちは沙耶香のことを持て囃す。

そんな中、優也は沙耶香に次のような質問を投げ掛けた。

「異能を鍛えるってことは沙耶香は最終的に警察や消防、軍を目指しているってことか？」

現在、日本は憲法9条を破棄し自衛隊を改め日本軍としている。これは20年前の隕石落下の際に韓国と北朝鮮の連合に攻められたためだ。

当時、アメリカは自国の混乱を理由に参戦せず、日本は独力でこれを凌ぐこととなった。

その後、アメリカが参戦してきたこともあって最終的に日本は勝利を収めるが、この件を機に憲法9条の論争は加速。最終的に破棄することが決定した。

なので、現在は自衛隊は名称を変え日本軍と呼ばれるようになっている。ちなみに一般的には『軍』と呼ぶことのほうが多い。

現状、異能を使った職業の主なところは軍、警察、消防が当てはまる。それ以外でも異能が使えないことはないのだが、仕事上で異能を使う場合、役所の許可が必要になってくるのだ。

会社と本人からの申請書を提出し、役所がそれを審査。異能を使う仕事とその仕事内での異能の役割が問題ないと役所が判断すると許可証が発行され、以後その仕事内でのみ限り異能が使えるようになる。無論、破れば本人、会社ともに御用となるのは言うまでもな

い。

ちなみに聞いた話だと数ある職業の中で人気なのは消防と警察。やはり、活躍するときは派手な上に機会も多いのがその理由らしい。

「はい。できれば警察に入りたいとは考えてるんですけど……」

恥ずかしそうに告げる沙耶香。

彼女の告げた内容に綾香たち女子三人は揃って納得した。

「ああ、納得」

「だから、風紀委員に入ったんだ」

そんな彼女たちの話に優也が興味を持ち、入ってくる。

「沙耶香って風紀委員に所属しているのか？」

「そうだけ。沙耶香の異能って結構強いからな」

そう言っつて頷きを返す綾香。

それを聞いて優也は沙耶香のほうへと視線を向ける。

「そうなのか？」

「そ、そんなことはありません」

「え、強いよ」

赤くなって否定する沙耶香。だが、周囲の女子たちがそれをさらに否定する。

やがて、会話は沙耶香の話から優也のクラブ活動をどうするかの話に移る。

興味ないと答える優也に、綾香やその友人たちがいろいろなクラ

ブを紹介していく。
そんな楽しい会話をしながら、昼休みの時間は過ぎていくのだっ
た……

昼休みが終わって最初の授業は異能の実技の授業だった。

学園での異能に関する授業は座学と実技の2種類が存在する。

座学では異端者の成り行きは仕組みなどの基本的な知識。心構え、
社会的な立場などを教え、実技で実践的な制御手法を教えている。

無論、生徒たちには実技が好評なのは言うまでもない。

ちなみに実技の場所は専用のスペースが用意されており、授業は
そこで行われている。

「それじゃあ、始めるぞ」

「よろしく願います」

体育会系の雰囲気を持つ男性教師が号令し、それと共に生徒たち
が一斉に頭を下げる。それが合図となって授業が始まった。

ちなみに生徒たちは制服姿のままだ。これは元々制服自体がかな
り丈夫にできているためだ。制服には最新の技術がかなり詰め込ま
れており、対衝撃、耐熱、耐電、防寒に対刃物など様々な対策が施
されている。おかげで大半の攻撃なら普通に軽減できてしまうだろ
う。

実技の授業は基本的に自由に訓練ができる。そのため、各個人が

思い思いに訓練していた。時折、悩んだ生徒が教師に相談来たり、計測などを頼んだりもしているが基本は生徒たちが独自にやっている。中には生徒同士で試合を行なっている者たちもいるくらいだ。

優也はそんな中で一人、体を動かしながら周囲の様子を見回していた。クラスメイトたちの異能を確かめるためだ。

彼が最初に目をつけたのは沙耶香だった。どうやら彼女は試合をするつもりらしい。

彼女の相手は女生徒だ。女生徒の傍には鉄棒が8本彼女を取り囲むように置かれている。どうやら彼女の異能と関係があるようだ。

「行きますわよ」

「よろしくお願いします」

強気な口調で告げる相手に対し沙耶香は柔らかい物腰で頭を下げる。

そして戦いが唐突に始まった。いきなり鉄棒が浮いたかと思うと、それらが一斉に沙耶香に殺到したのだ。

沙耶香はそれを右へのステップで避ける。しかし避けた直後、鉄棒がいきなり静止し次の瞬間には再び沙耶香のもとへと飛翔している。

鉄棒が襲う方向は沙耶香の左後。彼女の視界範囲外だ。

けれども、それは沙耶香にとっては予想の範囲内だったらしい。すぐさま背後へと振り返り棒と棒の間へと己の身を潜りこませ、攻撃を抜ける。

だが、8本の鉄棒はしつこく沙耶香を追いかける。それは避けようが逃げようが変わることはなかった。

「鉄限定の念動操作というところか」

鉄の棒がまっすぐしか飛ばない単調な動きだが、それは恐らくまだ操作が上手くないためだろう。

と、ここで沙耶香が迎撃に入った。彼女は追いかけてくる8本の鉄棒のほうへと振り返り、それらを睨むように見据える。

瞬間、8本の鉄棒がまとめて地面に叩き伏せられた。

激しい音が響き渡る。だが、誰も彼も彼女たちの戦いに見向きもしない。どうやら彼らの間では慣れたことだったようだ。

鉄棒を叩きつけられた相手は再び操作し復帰させようとするが、沙耶香が再び異能を使い地面へと戻す。その間に彼女は相手へと迫る。

接近に気が付いた相手は彼女から離れようと逃げ出そうとするが、判断が遅かった。

直後、打撃音と共に対戦相手が地面に叩きつけられる様を優也は目撃することになったのだった。

そのまま地面に倒れ動かない相手。だが、それも少しの間の話だった。

やがてゆっくりと身を起こす。

「……射程内の一定範囲に上からの打撃力を叩きつける異能といったところか」

これまでの情報から沙耶香の異能を分析する優也。

見ると沙耶香が倒れた相手を起こそうと手を伸ばすが、相手はそれを拒絶して彼女から離れていくのが見えた。どうやら相手は負けたのがよほど悔しかったようだ。

それを見終えて優也は視線をさらに動かす、次に見つけたのは綾香だった。どうやら彼女は一人で訓練をしているらしい。

彼女の周囲には炎が生み出され集まっていた。少しの間、そうやって炎を集めていた彼女だが、次の瞬間、彼女はそれを迷わず解き放った。集まった炎は砲撃となって放たれ彼女が設置したと思われる目標を丸々飲み込んだ。

「炎系の砲撃か。かなりの威力だな」

そんな感想を漏らしつつ、さらに優也は視線を巡らす。

彼女たち以外にも様々な異能の使い手たちがいた。

自由自在に空を飛んで戦闘機が見せるようなパフォーマンスをやつてのける少年、触ったパソコンをキーボードやマウスを使わずに操作する少女もいれば氷の礫を放つ者もいる。

そついつのを見回していると、ふと、優也は気になる人間を見つけた。

それはただ上を見上げている少年だ。試しに優也も見上げてみるが特に目ぼしいものはなにもない。あくまで優也が見えている範囲ではの話だが……

「なあ、悪い。名前を教えてくださいるか？」

興味を持った優也は彼に名前を尋ねることにした。

声を掛けられ少年は優也のほうへ顔を向ける。どこか大人しそうな雰囲気の子少年だった。顔立ちもどちらかというところ可愛いに近い顔立ちだ。

「黒河 悠斗です」

「よろしく」

丁寧な物腰で応えが返ってきた。ともかく挨拶を交わす優也。

「黒河はなにをやってるんだ？」

「ああ、空を見てたんです」

上を指差し答える悠斗。

「空って……」

「丁度、飛行機が見えたんでそれを見てたんです。どういふ形状と色合いなのかとも見てたんですよ」

その説明に優也はもう一度、空を見上げるが彼の目には飛行機らしきものは見えない。

「遠くのものが見える異能か」

「鷹の目ホークアイって言うんですけど……名前負けですよね。遠くを見るだけなら望遠鏡とかがあればすぐにできることですし……」

苦笑ともいえる声色で自分の異能の卑下する悠斗。どうやら彼は自分の異能に劣等感を抱いているようだ。

「そうか？ 少なくとも望遠鏡と違って視界は広いからその点では

有利だろ？」

「それでも遠くが見えるだけで、特になにかの役に立つわけでもないですし……」

試しにフォローしてみるが予想通りの反応だった。かなり重症なようだ。

「蒼野君の異能は僕のような異能じゃないといいですね……」
「それは実際になってみないとわからないからしな。それに結局使い方と鍛え方でどうにかなりそうな気がするし」

苦笑を浮かべ優也は答える。

「……本当にそうでしょうか？」

顔を俯かせ、独り言のようにこぼす悠斗。

その返答から彼自身、そうは思っていないことが伺えた。

やがて、時間が経ち授業が終わりを迎える。

生徒たちは次の授業のために教室へと戻っていく。

そうしてその日最後の授業が始まり、それが終わると優也にとっ
て初めての学校生活が終了したのだった。

「ふう」

そんなため息と共に優也が自分のベッドに倒れた。

ベッドが優也の体重を受け止め軋みを上げるが、彼は気にしない。

ベッドに顔をうずめながら優也は今日の出来事を回想する。

感想としては悪くなかったの一言だった。皆いい人達だったし、授業のほうも問題ない。

しかし、まさかすぐに沙耶香と再会したことには優也も驚いた。あんな偶然、物語の中だけの話だと思っていたが意外とそうでもなかったらしい。

クラスメイトたちは騒がしかったが、皆普通に優也のことを受け入れてくれた。

「ただまあ……ここからか」

けれども、優也の口からはそんな呟きが漏れる。

相手のことを見極めるならここから先だ。

誰しもいい面、悪い面を持っている。それを見極め知り、受け入れ交流を重ねていく。それが人との付き合い方だ。

ただ知り合いにそのことを言ってみたら『いや、まああつてるんだけどな……』『難しく考え過ぎじゃないか?』と呆れられた。

まあ、彼らの言う通りそういう面があるのかもしれないと最近、優也は自覚してきている。特に自分が特殊な環境だったのは間違いないので、確かにおかしなところはあるのだろう。

ともかく明日もしっかりやっていこう。と、そんなことを考えていると、突然彼の腹の虫が鳴り出した。

「夕食を食べに行くか」

時間を確認してみると19時ちよつと過ぎ。そろそろ食堂が夕食を始める時間帯だ。

彼がここに返ってきたのは18時半頃。そんなに時間が掛かった理由としては学園の周囲を散歩していたためだ。動機としては道の把握と店舗の確認。やはり、何か買いに行く際にはそういった情報が必要になってくるだろう。

ともかく優也はベッドから起き上がり、部屋を出て食堂に向かうとした。

「あれ、蒼野君」

知っている声を耳にしたのはそんな時だった。

声のほうに目をやると、そこにはドアを閉める途中の悠斗の姿があった。

「黒河か」

「蒼野君の部屋、ここだったんだ。でも、寮監の人はなにも言っていなかったけどな……」

疑問の顔を浮かべる悠斗。

その辺の話については寮監の仕業なので優也は笑って誤魔化すしかない。

「ともかく夕食を食べに行くか」

「そうだね」

そうして二人は食堂へと向かう。

食堂に着くと、優也のことを知っていた生徒たちが彼の姿を見て驚いた。

どういうことだと騒いでいるとそこに寮監がやってきて、優也の紹介とひっそりと彼の部屋の準備していたことを皆に伝えた。

啞然としている彼らに寮監は満足の笑みを浮かべると、彼は用事があると言ってすぐさまその場を後にする。

彼が去ると、食堂には再び平穩が戻った。

新しい仲間である優也に立ち直った寮生たちが声を掛け、一緒に夕食を楽しむ。最終的には誰かの思いつきでそのまま歓迎会へと移行し、騒ぎは再び寮監がやってくるまで続くことになった。

部屋に戻ってきた時、優也は既にくたくただった。風呂にはいるのも億劫になるほどだ。

目覚まし時計を早めにセットし朝起きてシャワーで済ませることにすると、そのまま彼は眠りの中へと落ちていく。

その途中、彼の顔が笑みを見せたのだが、その事實は本人を含め誰も知ることはなかったのだ……

2話「編入。そして学園へ」終了

3話「過ぎゆく日常」

優也が編入してから2週間近くの日がちが経過した。

クラスメイトとの交友は順調だ。皆、基本的に親切で学園に慣れていない優也をしきりに助けてくれた。うるさいのがたまに傷だがそれは十分妥協の範囲内である。

と、そんな感じで優也は楽しい学園生活を過ごしていたのだった。

時間は昼休み。廊下は昼食を思い思いに過ごそうとする生徒たちの姿で溢れかえっている。

外に向かう者、友人の教室に向かう者、学食に向かう者と皆、様々だ。

優也たちは3番目の学食に向かう者達だった。本日のメンバーは綾香と恵美と早苗、それに沙耶香と悠斗を加えた6人。

彼らは楽しそうに会話をしながら廊下を歩いていた。

「優也が来てから2週間近く経ったけど、随分と慣れてきたみたいだな」

先頭を歩く綾香が振り返りながら、そんなことを言ってきた。

それに優也が苦笑で答える。彼がいるのは集団の前から四番目の位置だ。

「それだけ経てば普通は慣れるだろ。まあ、異能の実技には参加できてないけどな」

「それは仕方ないじゃん。優也はまだ未発現体だし」

「そうそう」

そんな彼の言葉に恵美と早苗がフォローを入れてくる。ちなみに

彼女たちがいるのは二番目と三番目。

「頑張っていればいつかは蒼野さんの異能も判明しますよ」

「僕もそう思うよ」

さらに後方を歩く沙耶香や悠斗もそんなことを言ってくる。

そんな彼らの励ましに優也は自然と顔をほころばせる。その時だった。

廊下の向こう側から複数の男子生徒達が優也達の方に向かって歩いてきた。

彼らは優也の姿を認めると、ひそひそとなにか話しを始める。

「……こいつが噂の未発現体の奴か」

「白井に赤井と一緒に。ちゃっかりと強い奴に守ってもらってるって訳だな」

「っていうか、男のくせに女に守ってもらってなんとも思わないのかね」

廊下は生徒達で溢れており相手も小さな声だったが、会話の内容は優也達のところまでしっかり聞こえていた。

彼らの会話を聞いて先頭にいた綾香が足を止める。彼女の顔は怒りに満ちており、その表情のまま男子生徒たちの方へ振り返ろうとした。しかし

「綾香。忘れ物か？」

「へ？」

まるでタイミングを見計らったかのように優也がそんな問い掛け

をしてきた。

おかげで綾香は相手に絡む機会を失ってしまう。

慌てて綾香は男子生徒たちの方へと視線を戻すが、既に彼らは階段の影に隠れてしまっていた。もはや、話し掛けるタイミングではない。

「違うなら早く行こう。いい席がなくなっても困るしな……」

そうして睨むように階段の向こうに視線を向ける綾香に変わって優也が先頭に立つ。そんな彼の行動に一同は呆けた表情を浮かべるのだった。

「なんで止めた？」

昼食を始めてすぐにそんなことを綾香が尋ねてきた。

「なんの話だ？」

優也はとぼけるが、なんのことは既に予想がついている。

「廊下であった男子共の話だ。なんで止めたんだ？ あれ、お前のことだぞ」

「ああ、そうだったのか」

とりあえずしらばっくれてみるが、皆が優也の言葉を真に受けて

いないことを悟ると観念して白状することにした。

「絡んでも仕方ないだろう。むしろ、綾香が絡んだらさっきの話の信憑性が増すだけだし、俺としても問題ことを大きくする気はない。無視で済むならそれでいいさ」

「悔しくないのか？」

その問いに優也は肩をすくめる。

「思っても仕方ないしな」

「お前な」

「赤井さん落ち着いてください」

呆れる綾香を沙耶香がなだめる。

「赤井さんのお気持ちはわかります。ですが、あまり事を荒立てても蒼野さんのご迷惑にしかありませんよ？」

「む……それは……その通りだな」

沙耶香の指摘に正しさを感じたのか綾香はしぶしぶ同意する。

「第一、絡んだら異能を使った喧嘩に発展するかもしれません。風紀委員としてそれは止めなければいけませんし、そもそも赤井さんは対人は苦手じゃないですか」

「あの異能でか？」

その指摘に優也は眉をひそめる。

優也の記憶が正しければ、綾香の異能は対人で見ただけかなり強力な部類になるはずだ。にも関わらず対人が苦手というのはおかし

な話だと優也は思う。

けれども、その疑問をすぐに氷解した。

「綾香、異能を人に向けて撃つのが苦手なの」

「まあ、強力だからわからなくもないけどね」

「ああ、そういうことか」

恵美や早苗の言葉で優也は理解した。

強すぎる異能故に人を傷つけることを恐れているという訳だ。そういう理由なら優也も納得できる。

「ほっとけ!!」

顔を赤くして綾香が抗議の声を上げる。しかし、すぐに彼女は顔を伏せて大人しくなった。その際に瞳に暗い影があったように感じたのは優也の気のせいだろうか。

「……ともかく!! 問題なのは優也が未発現体ということで見下されているということだ。これはなんとかしないとまずいんじゃないか?」

少しして顔を上げた綾香が声を張り上げて先の出来事の原因を分析する。その上で彼女は沙耶香のほうを見た。

「……確かに強力な異能を持っている人が弱い相手に暴力を振るったり脅したりする例がありますので、どうにかするべきなのではないでしょうか……」

「具体的にどうするんですか?」

沙耶香の言葉を引き継いで悠斗が疑問を返す。

「そ、それはだな……やっぱり、誰かが傍にいるのが……」

「まあ、確かにそれが今打てる最善の手ですが……」

「やりすぎだろう。さすがに、そこまでしてもらわなくていい」

優也がそう言って首を横に振った。

「まあ、俺の問題だ。なにかあればどうにかするさ」

「どうにかって……お前、学園を舐めてるだろ？ 生徒とはいえ人によってはかなり危険な異能を使うんだぞ。なにかしら心得があるのかもしれないが、異能を軽く見ていると怪我じゃすまなくなるぞ」

優也の返答に綾香が怒鳴るように注意を促す。それが自分を心配していることだというのは優也もしっかりわかっていた。

「それはわかってるさ」

「だったら」

「ちょー、綾香。落ち着いて、熱くなりすぎ」

熱くなっていく綾香に慌てて友人達が止めに入る。

「気持ちは嬉しいけど、俺も友人にそこまで迷惑は掛けたくないしな」

そんな彼女たちを見つめながらそう告げると優也は立ち上がった。

「ちょっと、どこ行く気だ？」

「心配するな教室に帰るだけだ」

綾香の問いに優也はそう答えると、彼は弁当箱を持って教室へと帰っていくのであった。

そして翌日……

沙耶香は教室のドアを開けた。

時間は7時半頃、かなり早い時間帯だ。おかげで教室には誰もいない。

彼女がこんなに早く来たのは単純に早く目を覚ましてしまったからだ。丁度、動き出した食堂で朝食をとった後、すぐに出発し今に至る。

早朝ということと雀の鳴き声が聞こえ、窓から見えるいつもより低い朝日が新鮮に映る。

基本的に沙耶香は早いほうだが、さすがにここまで早いのは本人にとっても珍しい。記憶を遡っても教室に入れば大体誰かしらいた記憶がある。

改めて彼女は教室を見回す。

誰もいない教室に自分だけがいるというのはなんとというか不思議な気分させられる。

孤独感とは違う、どちらかというと優越感に近い。

沙耶香は決して一番手を自慢したがるような性格ではない。けれども、やはり一番手という事実にごとなく嬉しい気持ちが沸き上がってくる。

そうして再び教室を見回す沙耶香。と、そこで彼女は気付いた。自分の右隣、優也の席に二つの鞆があることに……

一つは教科書などを入れる通学鞆。もう一つはアタツシユケースだった。アタツシユケースは机の上に開かれた状態で置かれている。

昨日、両方共優也が持つて帰っているのを沙耶香は見ているので、忘れ物という可能性は低い。と、なると優也がもう登校しているということになる。しかし、教室に彼の姿はない。

思い返してみると、編入以降自分よりも先に優也が教室にいたという記憶はある。けれども、ここまで早い時間帯に登校しているとは思ってもみなかった。

手持ちぶたさだったこともあり、沙耶香は彼を探してみることにした。

ところが、彼の姿はどこにも見当たらない。

職員室、食堂、校庭……それらを回ってみたが、いずれにも彼の姿はなかった。

どこにいたのだろうかとうと校庭をさまよっていた。その時だ。彼女は異能の実技スペースから音がしたのを聞いた。

急いで沙耶香はそこに向かう。

実技用のスペースは休み時間や放課後であれば基本的に自由に使用することが出来る。

スペースは6つの部屋に別れており、授業ではそれらの部屋のうち、一つを使用している。

一部屋の広さは中々あり、ざっと30人近くが入っても空間的に

はまだまだ余裕がある状態だ。

ただ、異能の訓練をするとなるとこれでも狭く感じてしまう。異能にもよるが訓練のために結構な空間が必要になるからだ。

綾香などがいい例だろう。彼女の場合、下手したら流れ弾で他の生徒が被害を受ける可能性もあるので理想を言えばスペース丸々一部屋分が必要になってくる。

無論、そんなことができるはずもなく綾香も他の生徒も授業中はいろいろと配慮した上で共同利用するのが常識となっていた。

とはいえ、生徒の少ない早朝はまず誰も利用しない。そう考えると誰も邪魔されたくない訓練をするのであれば早朝はかなり都合のいい時間帯といえるだろう。

沙耶香が中に入ってみると予想通り、優也の姿がそこにはあった。彼を見つけた沙耶香は声を掛けようと口を開く。だが、その直後彼女は開きかけた口を閉じてしまった。

口を結んだ彼女の見つめる先、そこには

優也が踊るような身のこなしで実技用のスペースの中央を動き回っていた。

彼がやっているのは体術の訓練だろうか。両手にはトンファーと思しきものが握られている。

蹴る、振る、殴る。身を回しながら繰り出していく攻撃の数々。その速度、風を切る音から彼の体術がかなり高い練度であることが伺える。

大きく身を回しての右足による回し蹴り。一際大きな音が鳴り、そこにさらに左腕からの一撃が打たれる。そして続く流れで右腕の

突き。

絶え間ない流れるような連撃。その様に沙耶香は思わず見惚れてしまう。

彼の舞いはまだ終わらない。不意の移動からの両手突き、左肘打ち、右突き、そして最後にトンファーによる体重移動をのせた回し蹴りという連続攻撃。それらの攻撃が虚空の相手に向けて繰り出されていった。

綺麗なだけではない。彼が繰り出すそれは完成された動きそのものだ。威力速度共に申し分ないだろう。

沙耶香はそういうことに詳しくないが、そんな素人でもわかるくらい優也の動きは洗礼されていた。

やがて、動きが終わり、優也が大きく息を吐く。

そのタイミングをもって沙耶香は彼に拍手を送った。

突然、聴こえてきたその音に優也は驚き、ようやく彼は沙耶香の存在に気が付く。

「見てたのか？」

若干、頬を赤くしながら優也が訊ねる。どうやら見られて恥ずかしかったようだ。

「凄く綺麗でした。どこかの道場で学んだんですか？」

「と、いう言っよりも合理的な動きとかを自分で研究してたらこうなった感じだな」

そんな優也の返答に沙耶香は驚く。

「自己流であそこまでいったんですか！？ 凄いです」

さらに感心する沙耶香。そんな彼女に優也は諦めのため息を吐いた。

「先程のがあるから、昨日あれだけ自信満々にどうにかすると行ってたのですか？」

「まあ、それもある」

何かいい含んだ言葉。沙耶香はそこに引っかけかりを覚えるが、なにか事情があるのだと考え追求しないことにした。誰しも言いたくないことはあるだろう。

「こちらに来てからも毎日やってたんですか？」

「ああ、日課みたいなものだからな」

「そうなんですか」

優也の返事を聞いて沙耶香は少し思案に入る。

実を言えば沙耶香は体術に少し興味があった。

自身の異能はその効果上、かなり扱いの難しい部類だ。なので戦いの幅を拡げるために体術を学び、それを自身の異能与絡めようと考えていたのだ。そこに優也が現れた。

やがて、沙耶香は意を決すると優也に次のような頼みごとをする。

「……あの宜しければ、体術について教えてくれませんか？」

「……体術をか？」

優也のその問いに沙耶香は頷きを返す。

「別に構わないが、理由を聞いてもいいか？」

「以前にも申しましたが将来は警察関係の職に就きたいと考えてます。ですので、異能だけでなく体術もいくつか習得したほうが便利かと思ひまして」

「なるほどな」

それだけで優也は納得してくれた。そのことに沙耶香はほっとしてしまふ。

「明日からでいいのか？」

「はい。お願いします」

丁寧に頭を下げる沙耶香。

「今日はこのまま見てもいいでしょうか？」

「別に構わないぞ」

なんでもないといい様子で優也はそう答えると、そのまま彼は体術の練習を再開した。

沙耶香は彼の言葉に従い見学を続ける。

そうして二人は8時15分頃まで実技用のスペースで練習を続けたのだった……

その日の昼休みだった。

優也は一人、早足で食堂に向かっていた。

綾香達は先に食堂にたどり着いている筈だ。優也はトイレに寄ったため遅れたのだ。

今回は沙耶香はいない。彼女は風紀委員の活動があるとのことで教室で別れている。

そんな訳で優也は食堂に向かうべく急いでいた。声を掛けられたのはそんな時だ。

「おい、確か蒼野だったか？」

呼び掛けられて振り向けば、そこには三人の男子生徒達が立っていた。

確か昨日、優也に対していろいろ漏らしていた連中だ。彼らは薄気味悪い笑みを浮かべており、おかげで優也は彼ら用件におおよその見当がついた。

「ちょっと、顔を貸せ」

見下すような目で声を掛けてくる男子生徒。

「人を待たせてるから時間が掛かるのは遠慮したいんだが……」

一応、優也はそう言ってみるものの返ってきたのは予想通りの返答だった。

「安心しろってすぐに済む」

なんとも予想通り過ぎて思わず優也はため息を吐いてしまう。

「いいですよ。すぐに済むのなら……」

平然とした顔でそう返す優也。恐らく相手には強がっているように見えているのだろう。

優也の返事に男子生徒たちはさらに薄気味悪い笑みを深める。そうして優也は彼らに連れられてその場を後にするのだった。

四人が来たのは学園の隅のほうのスペースだった。

ここまで来ると他の生徒たちの姿もなく、誰かが来る気配もない。彼らにしてみれば都合のいい場所だろう。

「それで用件は？」

見当がついているにも関わらず、優也はあえて用件を尋ねる。

男子生徒たちは相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままだった。それはここに来ても変わらない。

「用件？ ああ、特訓だよ」

「お前が異能を使うように俺達がお前に攻撃を仕掛ける」

「だから、お前はそれに耐えるんだ」

下衆な笑い声を出しながら口々に言う三人。最早、隠す気もないようだ。

「じゃあ、行くぞ〜」

その言葉と共に一番前にいた男子生徒が仕掛けてきた。炎の矢が5本ほど現れ、優也のいる場所に向かって飛んでいく。

その間をくぐり抜けて避ける優也。炎の矢は優也がいた場所に着弾すると同時に爆発。背後から爆発の風が優也に追いついてくる。

優也はそれを味方につけて加速。攻撃を仕掛けた男子生徒の傍まで接近し肘打ちを見舞う。

「このー！」

そこに別の男子生徒が攻撃を仕掛けた。

地面の僅かな変化を知覚した優也はすぐさまその場から離脱。直後、彼がいた場所に円錐状をした土が下から襲い掛かる。

「ちっ」

避けられ舌打ちをする男子生徒。

そのまま後退した優也は全体を観察する。最後の一人はこちらの様子をニヤニヤと眺めているが参戦してくる気配はない。むしろ、周りの方を気にしている。見張り役だろうか？ だが、その疑問はすぐにわかった。

「助けが来るのを待っても無駄だぜ。あいつの異能が俺達を隠しているからな」

その言葉に優也はなるほどばかりに納得した。隠蔽役一人と攻撃役二人で優也を狙ってきたらしい。どうやらその程度の頭はあったようだ。

「だ・か・ら、諦める!!」

そう言つて再び攻撃を仕掛ける男子生徒二人。

優也はそれを避け続けるだけだ。攻撃の外回ったり、間を突き抜けたたり、当たる直前に体を傾けたりと様々な方法で攻撃から逃れる。こちらからの攻撃は時たま、チャンスがあれば拳や蹴りを放っているくらいだ。

そんな状態がしばらくの間続き、やがて相手の男子生徒の一人が全く攻撃が当たらないことに苛立つ。

「くそ!! なんて当たらねえんだ!!」

忌々しそうな顔を隠そうともせずに火矢を撃つ男子生徒。だが、結果はやはり優也の傍をかすめるだけだ。

「やっぱり、当たらないとわかる攻撃は怖くもないな」

「!?! 舐めるんじゃない!!」

瞬間、もう一人の男子生徒が激昂し土の槍で優也を囲もうとした。けれども、優也は盛り上がる土の槍を足場にしてあっさりと脱出。その際に使い手の男子生徒を踏みつける。

「くそ!?! なんて通じないんだ!?!」

理解出来ないという顔で男子生徒は疑問を叫ぶ。
そんな彼の疑問に優也は内心で応えた。

彼らの攻撃が当たらない理由は主に三つある。

一つは攻撃が単調なこと。相手がやっているのは一斉に放つか連続で放つかのどちらかだが、全てが当てようとする一撃だ。そこに誘導や囷の意図はなく、避ければそれで終わり。これほど楽な攻撃はない。

二つ目は相手の視線だ。攻撃の際に相手は無意識に視線が攻撃地点に向いている。おかげでどこに攻撃を撃とうとしているのか丸わかりだ。

先程の土の槍の檻も相手は優也の周囲に視線を巡らしていた。お陰で楽々と回避先を事前に検討することができた。

そして三つ目。それは……

そこまで考えていた時だった。

遠くで戦いを見ていた男子生徒が突然、地面に叩き潰された。

いきなりの事態に男子生徒二人は驚き、慌てて背後を振り返る。優也はというと事前にわかっていたのか表情を変えぬまま、こちらへと視線を向けていた。

彼らの視線の先。そこには一人の女子生徒が立っていた。

怒っているのだろう。彼女の顔はかなり険しい顔になっていた。それを見て男子生徒たちは震え上がる。

「し、白井 沙耶香……」

男子生徒の言葉の通り、彼らの目の前に立っていたのは沙耶香だった。彼女の腕には『風紀委員』と書かれた緑の腕章が巻きつけら

れている。

「そこにいるあなた達に風紀委員として警告します。今すぐ行為を中断し風紀委員室にまでご一緒ください」

凄みを利かせた警告。それだけで彼女がどの程度怒っているのか、すぐにわかった。

それは相手も同様だったようだ。抵抗する素振りも見せず、あっさり両手を上げる。

すると、それに合わせて他の風紀委員達が姿を現した。

彼らは男子生徒達を拘束すると、その腕に手錠のような物を取り付ける。

「封印錠か」

その手錠のようなものを見て優也がそう呟いた。

封印錠とは異端者の発現因子の活性化を抑えこむ力を持った物質で作られた手錠のことである。これを相手にはめることで相手の異能を封じることができるのだ。

「……向こうは学園内の風紀を乱した。これくらい当然」

優也の呟きに透き通るような声が答えを返す。

その声に優也が振り向けば、一人の女子生徒がこちらへと歩いてくるところだった。

風にたなびく黒髪のポニーテール。人形のような精巧な顔立ちと華奢な体付き、そして澄んだ青い瞳。それらが優也に冷たく透き通る氷をイメージさせる。

女子生徒はそのまま沙耶香の近くまで歩み寄ってくると、彼女に声を掛けた。

「沙耶香。見事な手際」

「ありがとうございます。銀城先輩」

褒められた沙耶香の態度からして、どうやら彼女が風紀委員をまとめる風紀委員長らしい。

「怪我はない？」

沙耶香を褒めた後、彼女は優也の方を見てそんなことを訊ねてきた。

「はい。大丈夫です」

実際、攻撃は全て完璧に対処してたので怪我ひとつしていない。

「そう。無事ならよかった」

先程からそうだが、彼女の顔や声に変化はない。ただ無事だったことに安堵してくれているのは確かかなようだ。

少なくとも口から発せられる言葉からそのことは伺えた。

「沙耶香。あなたは彼に付いていて。他の人達は彼らを風紀委員室まで連れて行って先生に報告」

その指示に風紀委員たちは迅速に従った。叩き伏せられた男子生徒は男子の風紀委員達が左右から肩を担いで運び、残った男子生徒

達も他の風紀委員たちが前後から挟む形で連れていってしまっ。

残ったのは優也と沙耶香、そして命令を下した風紀委員長だけとなった。

「……挨拶が遅れた」

少しして彼女は自分が名乗っていないことに気が付き、優也のほうへと顔を向ける。

「銀城^{シロギ} 真冬。風紀委員長。宜しく。蒼野 優也」

発せられる独特の透き通るような声色に優也は少し戸惑ってしまっが、悪い人ではないらしい。

けれども、少し気になることがあった。

「どうして俺のことを？」

「一応、あなたの担任の教師から気にかけるようには言われていた。こんな事態が起こるのは予想できてたから」

「なるほど」

確かに優也が未発現体である以上、この事態は予想されてしかるべきだ。ならば、先に風紀委員にそのことを相談するのも頷ける。

「今回はたまたま巡回していた風紀委員が蒼野さん達を見つけて報告。方向から場所は見当がつかましたし、顔から相手やその異能もすぐにわかりました」

彼女の言葉に続くように沙耶香が今回の事態を説明する。

つまり、彼らの命運は最初のほうで既に決まっていたというわけ

だ。それを聞いて優也は内心苦笑を浮かべてしまう。

「報告のためにあなたからも話が聞きたい。風紀委員室まで来てもらってもいい？」

「いいですけど、その前に綾香達から弁当箱を受け取りに行ってもいいですか？」

トイレに寄るときに弁当箱は綾香達に預けてしまった。どの程度の時間が掛かるかわからないが、現状でも結構時間が経ってしまった。正直な所、報告と一緒に昼食を済ませたいと思っていた。

「わかった。先に行って待ってる。沙耶香は彼と一緒に行動して」
「わかりました」

そうして沙耶香の返事と同時に真冬は校舎の方へと歩き出した。それを見送りつつ、優也たちも早足で食堂の方へと向かい始める。

「では、私達も急ぎましょうか」
「ああ」

時間もあまりないので、そのほうがいいだろう。
そして二人はその場を後にした。

ちなみにこの後、事件を知って怒ってしまった綾香をなだめるのに時間を食ってしまうのだが、それはどうでもいい話である。

「さつきはありがとうな」

授業の終わった放課後。

開口一番に優也は沙耶香にそうお礼を言った。

「え？ ああ、気にしないでください。あれは私達の活動ですので」

いきなりの礼に沙耶香は戸惑うが、すぐに昼休みの件だと気付くとそう言っただけで謙遜した。

「けど、助かったことには変わりないしな」

そんな彼女に優也はそう返す。

すると、その言葉に沙耶香はなんとも言えない顔を浮かべた。

「どうしたんだ？」

それが気になった優也は思い切って尋ねてみる。

尋ねられた沙耶香は少し迷った素振りを見せるが、やがて腹を決めたのか次のような質問を投げかけてきた。

「……あの蒼野さん、あの時相手の攻撃を全部避けたというのは本当ですか？」

「……まあ、事実だな」

嘘を言っても仕方がないので肯定する。

その肯定に沙耶香が目を見開いた。

「……彼らの言っていたことは本当だったんですね」

「信じられないか？」

その問いに沙耶香はコクンと頷く。

「……余りにも驚くべき内容でしたので」

「そうなのか？」

優也からすれば、そのほうが驚きだ。

避けるだけなら異端者でない人間でも不可能ではない。

どれだけ強力な異能を持っていようが結局、扱うのは人間だ。狙う位置とタイミングさえわかれば避けることは十分できる。相手の異能がわかっていれば尚更だ。

「だって、あれだけの攻撃を異能も使わず全部避け続けるなんて……」

「やろうと思えばできなくはないだろ？」

余りの驚きっぷりに思わずそんな言葉がでてしまったが、その言葉に沙耶香がさらに驚く。

「……もしかしてそういうのも体術で得たのですか？」

「体術と言うよりも戦闘における分析と考察の領分だな」

さらりと優也が口にした台詞。その台詞に沙耶香が戸惑う。

「え、ええと……何といたしますか……難しそうな話ですね」

「……そうなのかもな」

少し悩んだ顔を浮かべた後、優也はそう結論することにした。どうやら皆が考えることだと思っていた自分がおかしかったらしい。

「それだけ生身でできるのなら、異能を使えるようになったらかなり強くなりそうですね」

「いや、戦闘向きの異能とは限らないだろ？」

その指摘に沙耶香ははっとする。

「そうですね。すみません」

「いや、謝られるようなことじゃないから、気にしないでいい」

そう言って優也は謝ろうとする沙耶香を止める。

気が付けば他の生徒達は帰ってしまったようで、残っているのは優也と沙耶香の二人だけになっていた。

「それじゃあ、俺達も帰るか」

「そうですね」

そうして二人は帰路につくのだった。

「蒼野さんは強くなりたいですか？」

帰りの途中、突然沙耶香がそんなことを訊ねてきた。

「いきなりだな」

いきなりの質問にさすがに優也も驚いてしまう。

「あ、す」

「まあ、強くなりたいとは思うな」

そのことに気付いた彼女が慌てて謝罪しようとするが、その前に優也が問いの答えを返す方が早かった。

彼は今、夕焼けの空を見上げている。けれども、何故かその瞳がここではないどこか遠くを見ているように沙耶香には感じられた。

「正確に言えば強くなると誓った。二度とあんなことを起こさないために……」

言葉に帯びた雰囲気。それが突然鋭く強くなる。

見れば優也の拳が強く握られていた。握りすぎて拳を痛めてしまっているのではないかと沙耶香が心配してしまったほどだ。

「……あ、悪い。驚かせてしまったな」

「あ、いえ、むしろ私の方こそすいません。どうやら嫌な思い出に触れてしまったようで……」

我に返り慌てて沙耶香に謝る優也。それに対して沙耶香も謝り返す。

「まあ、それは気にするな」

優也がそう答えてこの話は終わった。かに見えた。

「……大丈夫です」

けれどもその直後、沙耶香がいきなりそんなことを言ってきた。

「は？」

いきなりの言葉に思わず優也はキョトンとしてしまう。

「体術であれだけ頑張れるんです。きっと異能がわかればすぐに蒼野さんは強くなれますよ」

「それは買いかぶり過ぎだろ」

彼女の褒め言葉に苦笑して答える優也。

その反応に沙耶香が口を尖らせる。

「そんなことありません。頑張れる人は強くなれる。私はそう思っています。私自身がそうでしたから」

「沙耶香が？」

意外という顔を浮かべる優也。

そんな彼に沙耶香は頷きを返す。

「はい。父に『この力は誰かを救う力がある。だから、この力で誰かを傷つけるのはいけないことだよ』と教わっていたので、小さい頃からこの力で誰かを救えるようにと思ってずっと磨き続けていました」

「そうなのか」

彼女が真面目な性格なのも警察関係の職に就こうと思ったのも、その言葉が原因だったのだろう。

「しつかりした父親だったんだな」

「まあ、最近は研究に忙しいようで連絡がつかないんですけど」

「研究？ 沙耶香の父親って研究者なのか？」

彼女の説明に出てきたキーワード。それに引っかかり覚えた優也は、それを確認するため急いで彼女に疑問を投げかける。

「はい。両親は両方共研究者で父は白井雄輔と申します。ご存知でしょうか？」

その名前に優也は驚いた。

「知ってるもなにも日本を代表する異端者の研究者じゃないか」

白井雄輔。数々の功績を打ち立て、世界的にもかなり有名な異端者研究者だ。特に異能を封じる封印錠の物質を創りだしたことは世界中でもかなり話題となった。

つまり、沙耶香はそんな有名人の娘であるということだ。

「沙耶香ってそんな凄い人の娘だったんだ」

「あ、はい。すみません。そういえばそのことは話してませんでしたね」

そう言って頭を下げる沙耶香。

「沙耶香が警察を志望しているのもそういう理由からか？」

「はい。その通りです」

笑顔の肯定。その笑顔に優也は思わず頬を緩めてしまう。その時

だ。

沙耶香が段差に足を引っかけ、前のめりに倒れた。慌てて優也が前に回り、その身を受け止める。

「す、すみません。ありがとうございます」

急いで身を起こし、優也にお礼を言う沙耶香。しかし、その優也から返事が返ってこない。

奇妙に思い顔を優也のほうに向けてみると……

優也は顔面蒼白になって立ちすくんでいた。

瞳は見開かれたまま僅かに揺れ、焦点は目の前ではない別の場所を見ているかのようにぼんやりとしている。

「あ、蒼野さん。大丈夫ですか？」

様子がおかしいことに気が付いた沙耶香が優也の体を揺すり呼び掛ける。けれども、彼は気付いてないのか返事ひとつしないまま固まり続ける。

結局、優也が沙耶香の呼び掛けに気が付いたのはそれから少しばかり経った後のことだった。

「！？ 沙耶香……」

気が付いた優也はその瞳を呼び掛ける沙耶香に向ける。

「よかった。いきなり顔面蒼白になったので、どうしたのかと思っ

て心配してしまいました」

「あ、ああ……悪い心配掛けたな。もう大丈夫だ」

安堵を見せる沙耶香。そんな彼女に優也は己の健全ぶりをアピールした。

「一体どうしたのですか？ いきなり固まってしまって……」

「……ちよっと、考え事をしててな」

苦笑とも微笑ともつかない笑みを僅かに見せて、優也が答える。

「考え事……ですか？」

その答えに沙耶香は納得いないというような顔を見せた。

「ああ。だから心配するな。っと、ここでお別れだな。それじゃあな」

けれども、優也は強引に話を終わらせ駆け出す。行く先は曲がり角だ。

「あ……」

慌てて沙耶香が何かを言おうとするが、その時には既に優也の背中が角の向こう側へと隠れるところだった。そのまま彼は角の向こう側に消えてしまう。

それを見て沙耶香は諦めのため息を吐くと、自分も寮に帰るべく己の帰り道を歩くことにするのだった。

沙耶香の姿が見えなくなったのを確認して、優也は角から姿を現

す。

心なしかその顔は焦りの表情を帯びていた。

再び優也は彼女の消えた方を見つめる。既にそこに沙耶香の姿はない。けれども、彼の表情は何かを決心したような表情に変わっていく。

そうして彼は踵かかとを返すと急いで学園の方へと戻っていくのであった。

3話「過ぎゆく日常」終了

4話「蒼野優也」(前書き)

すみません。長らくおまたせしました。
4話の投稿です。

4話「蒼野優也」

夕方から夜へと変わる狭間の時。

赤から黒へと移り変わるグラデーシヨンが雲ひとつない空を染め上げる。

黒の空には様々な光を放つ小さな星々。

そんな空の下、沙耶香は一人帰路に着いていた。

今日は風紀委員の仕事で時間が掛かってしまい結果、帰りがこの時間になってしまった。

そのせいか、通りには彼女以外誰の姿もない。

彼女がいるのは道路だ。周囲には住宅が目立ち、そこから僅かな明かりが窓を介して外へと溢れている。時間も時間のせい、美味しそうな匂いも漂ってきていた。

その匂いに思わず沙耶香は顔を緩めてしまう。

「今日の夕食はなんでしようか」

そんなことを呟きながら彼女は暗い道路を進んでいた。

と、電信柱の近くに猫がいるのを発見する。

思わず、走りだす沙耶香。だが、慌てて走りだしたためか、足がもつれてしまい彼女は道路に転んでしまった。

「きゃあ!？」

倒れた音とその声に猫は驚き、逃げるように電信柱から離れていく。

後に残ったのは転んだ少女の姿のみ。

やがて、少女がゆっくりと身を起こした。そして、怪我がないことを確かめると彼女は立ち上がる。

そうしてから沙耶香は辺りを見回した。

幸いというべきか今の事態を目撃した者はいない。そのことにはつとしつつ、彼女はふと数日前のことを思い出す。

あの時は倒れる己の身を優也が支えてくれた。そして次の瞬間、彼の様子がおかしくなった。

その変化は思わず沙耶香が心配になったほどだ。何度も彼に呼びかけた。

気が付いた彼はその後、心配すると言って帰ってしまったが、それを鵜呑みにするほどお人好しな沙耶香ではない。一人で帰っている間も大丈夫だろうかと不安になっていた。

だが翌日、彼はいつも通りで姿を見せた。早朝の訓練も休み時間もおかしなところはどこにもない。

その事実には沙耶香は内心安堵した。しかし、あれはなんだったのかはわからないはまだ。

何度かそれについて尋ねようかとも思ったが、その度に誤魔化されてしまう。まるで、触れないでくれと言っているかのように……

それが沙耶香には疑問だった。何故、触れないで欲しいのか。

心配するほどでもないことなら話しても良さそうな気がするが、実際彼は話そうとはしない。

何か理由があるのだろうか。

「はあ………」

思わず沙耶香はため息を吐いてしまう。少し考え過ぎたようだ。

ふと、顔を上げてみると公園の入り口が見えた。向かい側には自動販売機もある。

少し休憩しよう。そう考えて彼女は自動販売機に向かおうとするその時だ。

「失礼。白井 沙耶香さんで合ってるよね？」

突然、背後から声を掛けられた。

声に驚いてすぐさま沙耶香は振り返る。すると、そこには一人の男性が立っていた。

顔立ち的に年齢は20代半ばだろうか。さっぱりとした顔つきに笑みを浮かべた顔。好青年という言葉がしっくりくるようなそんな人物だった。

服装は黒の上着と白のシャツ、そして紺色のジーンズのズボン。

「あの……どなたですか？」

見知らぬ人に突然、自分の名前を呼ばれ沙耶香は警戒する。

父の仕事の関係上、父からは『怪しい人が近づいてきたら逃げろ』と幾度となく沙耶香は忠告されていた。

だからこそ、今日の前にいるこの男性がどういつ目的で自分に接触してきたのか見極めなければならぬ。

唾を飲み込む沙耶香。対する相手は笑みを崩さぬまま話を続ける。

「悪いんだけど一緒に来てくれないかな？」

「申し訳ございません。お断わりします」

すかさず沙耶香は返事を返した。

返事を返しながら彼女は相手に対し徐々に距離をとっていく。何をしても距離があつたほうが彼女にしてみれば有利だからだ。

「ん〜、そうか。残念だな〜。可愛いからできれば手荒なことはしたくなかつたんだけどな〜」

彼女の返事を聞いて困つたような顔を浮かべる相手。しかし、その顔もすぐに鋭い目付きに変わった。

「それじゃあ、仕方がない。無理矢理にでも攫うとしますか」

それまでの柔らかい感じの声色と打って変わって唸るような低い声で彼は告げる。

その豹変に思わず沙耶香は背筋を凍らせてしまった。

ほとんど反射的に彼女は己の異能を使用する。

直後、轟音が鳴り響いた。沙耶香の異能が発動した証拠だ。

彼女の異能の力を受けてアスファルトがひび割れ砕けていく。撒き散る破片と埃。だが、相手の姿はそこにない。

「えっ？」

驚きの声を漏らす沙耶香。直後、彼女の右耳が音を捉えた。

音に反応して右へと視線を向ける。すると、そこには先ほどの男が自分に向かって迫ってくるのが見えた。速い。

すぐさま異端者という言葉が頭に浮かぶが、今はそんなことを考えるよりも相手に対応しなければならぬ。だが、相手のあまりの速さに彼女の体は対応しきれない。

そのままハンカチを持った男の右手が沙耶香に迫ろうとしたその時だった。

突然、男が後ろへと飛んだ。普通の人間ではありえないような脚力。その力を持って男は大きく後退する。

何故？ そう思う沙耶香。相手は折角の攻撃チャンスをふいにしたのだ。どうしてそんなことをしたのか彼女にはわからなかった。

だが、その理由はすぐに判明した。

その直後、男がいた場所に何者かが降り立ったのだ。

青と白の色合いが特徴的な上着に白いシャツと赤いネクタイ、そして紺色のズボン。それは沙耶香も見慣れた学園の男子制服だった。両手には見覚えのある武器が握られている。

その武器を見て沙耶香は目の前の人物が誰なのか、すぐにわかった。

「……蒼野さん？」

その言葉の通り、彼女の目の前に蒼野 優也がトンファーを持って立っていた。

疑問系だったのは彼女自身、信じられなかったからだ。何故、彼がこんな所にいるのか？ 何故、助けてくれたのか？

いろんな疑問が頭に浮かんで消えていくが、ともかく言わなければならぬことがある。

「逃げてください！！ 相手は異端者です。蒼野さんじゃ敵いません」

相手はどう見ても、プロ。優也がどれだけ体術に優れていようが、さすがにプロの異端者に勝てるわけがない。

だからこそ、沙耶香は優也に逃げることを促した。このままでは彼が傷ついてしまう。いや傷つくだけならまだいい。最悪の場合……

だが、そんな彼女の心情に気付いていないのか。優也は構えの姿勢をとり、相手に向かって警告の言葉を口にする。

「あんたが何者なのかはどうでもいい。用件は一つだ。諦めて帰れ」「おいおい、学園の学生が俺に警告だ？ いい度胸じゃないか」

軽い口調。沙耶香を見ると、相手は苦笑を浮かべ優也のことを見下ろしていた。ただ気のせいとその類は少し引きつつている。

「その言葉、後悔し」

男がそこまで言った瞬間だった。

突然、優也が男へと向かって駆け出した。

相手に接近する最中、優也は男の顔を見た。男の顔には驚きがある。いきなり仕掛けられたらだから当然といえば当然だ。

そんな男に優也は若干怒りを持っていた。

彼が沙耶香を攫う。

それを知ったのは数日前、沙耶香と一緒に返ってきた時だ。丁度、顔面が蒼白になったあの時、彼はその光景を知覚していた。

本当の所、優也は未発現体ではない。どういう異能を持っているのか彼自身、本当は自覚していた。しかし、その異能故に彼はその力を公表するわけにはいかない。

優也の異能は知っている者達の間では『先見の姿見』と呼ばれていた。簡単にいえば未来を知覚する異能だ。大体、数秒前後　ただし最長記録は10秒程　の未来の情報を知覚することができる。知覚なので実際は一瞬だ。

本来、この異能は無作為に発動し、内容は誰かしら　大半は本人や本人の知り合い　の危機を伝えることが多い。

優也が知覚したのは男が沙耶香にハンカチを嗅がせ、眠らせたところに仲間が迎えに来た光景。

何故、沙耶香を攫うのかはわからない。彼が知覚したのは彼が沙耶香を攫う部分だけだからだ。

だが、何にしても沙耶香が危険な目に合うことには変わりない。ならば、迷う必要はない。友人の危機をただ救うだけだ。

沙耶香を攫おうとする男も許すつもりはない。逃さず確実に倒す。彼はそう心の中で決めていた。

相手に接近していく中、優也は先程、己が任意で知覚した内容を思い返す。

優也の『先見の姿見』は本来、無作為に発動するため発動に優也の意思は介入しない。

だが、それは望む時にこの力を振るえないことを意味していた。

けれども、それでは守りたい者を守れない。救いたい者を救うことなどできない。

どれだけ先がわかるうと変えられるだけの力がなければ、変えることなどできないのだ。

かつて優也はそれを自分自身の身で体感していた。だからこそ、彼はさらなる力を望んだ。

長年に渡る異能の訓練と研究。その結果、遂に彼はこの異能を任意で使うことができるようになったのだ。

とはいえ、任意の方には現在、制約が多い。

まず、知覚できるのは自分に纏わることであること。次に任意で見れる時間は一時間先までの範囲であること。最後に任意で使う場合、指定した時間が経過するまで再度任意で知覚することができなくなるということ。

以上の3つだ。

優也が知覚したのは男が言葉を言い終わると同時に優也に攻撃を仕掛けてくるという内容だった。

故に彼は主導権を握るために、逆にこちらから先に仕掛けることにしたのだ。

現在、優也はこの任意知覚を大体5秒間隔で使用している。それが一番使いやすいからだ。

そして丁度その5秒が経った。すぐさま優也は新たな未来を知覚する。知覚した内容は相手が攻撃を避け、優也の顔面に速度を乗せた右拳を見舞う様子だった。

その内容を見て優也は戦い方を組立て直す。

そうして彼は相手に接近すると、右のトンファーを内から外へと振り抜いた。だが、攻撃は空を切る。

男が後方へと飛んで避けたためだ。速い。男はたった一歩でかなりの距離を稼ぐ。速度上昇と言うよりも脚力を上げた感じだ。

そして男は地面に着地と同時に優也の元に接近した。右の拳の構え付きでだ。

だが、それは優也の予想通りの流れだった。

振り切った右腕はまだ動いている。丁度、上から見たら時計周りに回っている状態だ。その流れを利用して左腕を動かし始める。と同時に足の力を抜き身を前へと倒した。

この急な動きに相手は反応出来ない。慌てて攻撃の軌道修正を図るが、その拳は優也の顔を捉えることはなく、そのまま彼の頭上を掠めていく。

相手の拳を潜りながら優也は左腕を振りぬく。狙う場所は腹。身を低くしていることもあって腕の位置的にも丁度いい高さだ。

結果、男の腹に強烈な一撃が叩きこまれた。

「ぐあ!？」

左腕の力とトンファーの重さ、加えて己自身の速度をまともに食らった相手は体をくの字にし、思いつきり息を吐く。

それと同時に優也は新たな未来を知覚した。見えたのは叩きつけられた相手が左脇を庇いながら左足を蹴って距離をとる様子だ。

一方、カウンターを食らった相手はそのまま膝をつき、出しきった息を埋めようと急いで息を吸う。

だが、その隙に優也は次の攻撃に入る。

今度は右腕の突き。上からやや下へと振り下ろすような軌道だ。酸素を求めろのに必死だった相手は抵抗出来ない。そのまま攻撃は男の左脇腹に直撃した。

バウンドするようなに地面に叩きつけられる男。左脇腹を庇いながら急いで彼は優也から離れようとする。

けれども、それは既に優也も知っていることだ。

すぐさま彼は己の右足で相手の左脛ひざもとを踏みつけた。動かそうと思っていた左足を踏まれ、相手は一瞬、痛みに怯んでしまう。

そこに続けて左腕の攻撃を全力で見舞う優也。狙いは相手の顔面。

攻撃を受けて男が地面を転がった。その隙に優也は己の異能を使用。先の未来を知覚する。

知覚したのはふらふらになりながらも、どうにか起き上がり息を整える相手の姿だ。両者の距離はだいぶ離れている。どうやらまだ意識があったようで己の異能で距離を離れたらしい。

今、離されるのはまずい。すぐさま優也は飛ばした相手を追いかける。

優也は未来を知覚する異能を有しているが、実際の戦闘は己の身体能力任せだ。男の異能にまともに対抗できる訳もなく、逃げを選ばざればそれを止める手立てもない。

だからこそ、男の行動を止めなければならない。

見ると、男は転がる己を無理矢理止めると身を起こし、痛む体を引きずりながら右足で強引に距離をとろうとしている。

両者の距離は1・5m程。このままでは間に合わない。故に優也は攻撃を選択した。

彼の選んだ攻撃。それは左腕のトンファーを相手に向けて投擲することだ。

左上から右下。振り下ろすような軌道で左腕を動かしてトンファーを投げつける。

トンファーは上から下へと回りながら相手のもとへ飛んでいき

そのまま相手の顔面に直撃した。

まともに攻撃を浴びて怯む男。トンファーは男にぶつかり上へと跳ね上がると、回転しながら優也の方へと戻っていく。

そのトンファーを優也は左手でキャッチ。左腕を引くと同時に滑車の原理で右腕を前に突き出した。狙いは男の心臓部分。

強烈の一撃が男を襲う。この一撃で男の動きが再び止まった。その隙を優也は見逃さない。

攻撃の反作用を利用して優也は右腕を引く。そして再び滑車の原理を利用して今度は左腕の突きを男の顎目掛けて放った。

男に抗う術などない。そのまま確かな手応えが辺りに響いたのだ。つた。

攻撃をまともに受けた男が体を伸ばしながら、そのまま後ろへと倒れていく。

それを見送りながら優也は新たな未来を知覚した。

知覚したわずか先の未来の中でも男は相変わらず倒れたままのようだ。そんな男の容態を見る自分。どうやら気を失ったことを確認できたらしい。

とりあえず優也は終わったことに安堵し息を吐いた。無傷とはいえ、やはり疲れる。

そうして一息入れた後、彼は一応己の見た未来に従い、男の容態を確認することにした。やらなくても結果が変わることはないだろうが、何の要因が起こるかわからない以上、従うべきところは従うべきだ。

確認の結果、やはり男は気を失っていた。それがわかると、優也はポケットから携帯電話を取り出す。警察に連絡するためだ。

そうしていくつかのやり取りをした後、彼は電話を切り携帯電話をポケットに戻した。

「時期に警察が来る。沙耶香はどうするんだ？」

そうして沙耶香に話しかけながら振り返る優也。

沙耶香はと言うと、未だに信じられないのか瞳を大きくしたまま優也と男が戦っていた場所を見つめていた。

「沙耶香？」

返事がないことに訝^{いぶか}しみ、優也は彼女に近寄るとその目の前で手を振る。

「え？ あ！？ 蒼野さん」

ようやく彼女は優也の存在に気が付いたようだ。驚いた声を上げて沙耶香が彼の名前を呼んだ。

「大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

すぐさま元気な返事を返す沙耶香。どうやら大丈夫のようだ。そのことに優也は安堵の表情を浮かべる。

ただ、沙耶香の様子が少しおかしかった。

なんとも言えないような表情で彼女は優也のことを見つめている。気のせいかその瞳には怯えの色が若干見えた。

けれども、それは無理もないことかもしれない。優也は異端者、それも明らかにプロっぽい人間を相手に圧勝したのだ。沙耶香にしてみれば不気味に見えるだろう。

だからこそ、その不気味さを解消するために彼女はある問いを投げかけてくるはずだと優也は予想した。

その予想通り、次の瞬間、沙耶香の口からその問いが優也に向けて投げ掛けられた。

「あの……蒼野さんって何者なんですか？」

「……………」

「だって、その……明らかにプロっぽい人を相手に生身で勝ってし

まじし……」

実際は違うのだが、彼女にはそう見えるだろう。

（何者か、か……それが言えれば苦勞はないんだけどな……）

だが、言うことはできない。己の異能のことも、己の今の所属のことも……

「蒼野さん？」

中々返事が返ってこないことを不思議に思ったのか、沙耶香が優也の名前を呼ぶ。

「あ、ああ……」

反射的に言葉を返してしまう優也。しかし、話せることなど何もない以上、続くのは沈黙だけだ。

「……………」

沙耶香は優也のことをじっと見つめている。その表情はどこか泣きそうになっていた。

優也の中の良心が痛み、そのせいで彼は彼女から目を逸らしてしまふ。

見つめる沙耶香と逸らす優也。結局、二人の状態は警察が到着するまでずっと続くのだった……

そして翌日……

優也と沙耶香は綾香たちや悠斗と共に食堂にいた。いつも通りの昼休み。ただ、優也と沙耶香にとってはそうではなかった。

対面に座っている沙耶香は時々、優也を伺うような視線を向けてくる。それは朝の訓練や授業中でもそうだった。

恐らく、昨日のことが気になってるのだろう。

昨晚、現場に到着した警察はすぐさま男を逮捕。優也と沙耶香は事情を話すために警察署に連れていかれた。一通りの説明を終えると優也はそのまま帰宅。沙耶香は父親からの使いが迎えに来るまで警察署に残ることになった。

結局、優也は沙耶香の質問に答えないまま彼女と別れたのだ。

言う訳にはいかないのが、己がしたことが間違っていたとは優也は思っていない。ただ、しつこく質問を繰り返されるよりはマシかもしれないが、これはこれで対応に困る。

とりあえずは彼は無視するしかなかった。

ただ、結構な頻度で視線を向けてきているので、誰も気付いていないとは思えない。

「……なあ、沙耶香。何か、今日はやけに優也のことを見ているけど、何かあったのか？」

案の定、それに気付いた綾香が彼女に訊ねてきた。

「え？ あ、いえ、特には何も……」

そうは言っているが、何かがあったのは戸惑った態度からバレバシだ。

優也でもそう思ったのだから、他の人達も同様だろう。

やはり、というべきか彼女の態度に綾香と早苗、恵美がアイコンタクトを取り合った。

そして、一瞬視線を優也へと向けてくる。

嫌な予感を感じて、優也は肩を振るえさせてしまった。

「なあ、優也。沙耶香と何かあったんだ？」

「悪い。心当たりがない」

これ以上、言っても沙耶香が正直に話すとは思えなかったのだろう。綾香は質問の相手を優也に変えてきた。だが、彼はその問いに對してきっぱりとそう言い返す。

「……本当に？」

「本当にだ」

即答の上にはっきりした声。

綾香が睨むように優也のことを見てくるが、それでも優也の顔は揺らがない。

長い睨めっこ……

やがて、綾香が根負けし、ため息を吐いた。

「……わかった」

それで早苗や恵美も諦めたらしい。綾香と同じくため息を見せた。

「まあ、何にしても……沙耶香。あまり、頻繁に優也に視線を向けてると皆に誤解されるぞ」

「え!?! あ……」

その指摘で彼女は皆に見られていたことにようやく気付いたらしい。

赤い顔になって俯いてしまう。

「もしかして……蒼野さんも?」

「……まあ、気付いていた」

遠慮がちに答える優也。

それで益々、沙耶香は顔を赤くして伏せてしまった。

「……昨日はいつも通りだったよな?」

「うん」

「ってことは、放課後?」

そんな彼女を置いて、綾香、恵美、早苗の3人は顔を寄せ合い内緒話を始めている。どうやら何があったのか予想しあうつもりのもりようだ。

やめろと言っても止まらないだろうから、放っておくことにする。

残ったのは優也と悠斗の男二人。しかし、二人は言葉を交わすこ

ともなく静かに昼食を食べていた。

実のところ、優也は自分から話し掛けるのを苦手としていた。と、
いうよりも理由がなければあまり人に話しかけない質なのだ。

話しかけられれば答えるが、必要と感じなければ基本は黙ったまま。彼自身、静かなのは嫌いではない。考え事に集中できるし、本を読むことも出来る。

一方の悠斗は気弱な性格だ。自分から話し掛ける側の人間ではないだろう。

そういう訳もあって、内緒話をヒートアップしていく綾香たちを放っておいて男二人は静かな昼食を過ごすのだった。

だが、そこにある変化が訪れる。

『生徒のお呼び出しです。2 A蒼野 優也。繰り返します。2
A蒼野 優也。至急、理事長室までお越しください』

その途端、沙耶香を含め全員の視線が優也に集まった。

「……理事長室って」

「優也。何したの？」

「また、誰かに襲われたのか!!」

「大丈夫なの？」

早苗、恵美、綾香、悠斗の順番で話しかけられる優也。口は開かなかったが、沙耶香の顔にも心配そうな表情が見て取れる。

彼らの反応に対し、優也は戸惑いを返すしかなかった。実際、彼

自身何も知らないのだから無理はない。

「お、俺が知っているわけないだろ!!」

「でも、理事長室だぞ？ 良くも悪くもなにかやったとしか……」

と、そこで綾香は突然、沙耶香の方を見た。

「え？ あ、綾香さん？ いきないどうなされたのですか？」

いきなり視線を向けられ驚く沙耶香。

「いや、沙耶香との件に関係あんのかなって思って……」

「だ、だから、何もないと先程、言ったはずです!!」

綾香の言葉に沙耶香が怒気を含んだ声で叫ぶ。

(そんな反応するから、怪しまれるだけだな)

そう思いながらも優也はそれを口にする事はなかった。今、彼が話しかければ話が蒸し返されるだけ。ここは黙っているのが一番だ。

一方、綾香たちは沙耶香の否定で別の理由を考えることにしたよ
うだ。

「うん。じゃあ、後は実は優也と理事長が知り合いで茶飲み友達が欲しくなったとか……」

「え」

「何それ」

続いている綾香の案に恵美と早苗が呆れた声で反応を返していた。

実際、知り合いなのは本当のことだが、そのことを優也は言うつもりはない。

第一、彼がそんなことで呼ぶとは考えづらい。

(あるとすれば昨日の報告か?)

理事長である玄冬は優也の異能のことを知っている。

そのため、沙耶香の危機を知った時、すぐに優也は彼にそのことを報告した。

方針としては優也が彼女を守ることで落ち着き、今日沙耶香が登校した事で今回の件の結末については大体わかっているはずだ。

加えて言えば詳細な報告も後からするつもりで、その事は事前に言っている。

呼び出してまでして、急ぐような内容でもないはずだ。

「……まあ、呼び出されたんだから仕方ないか。ちょっと行ってくる」

そう言うつと優也は立ち上がり、弁当を片付ける。

「まあ、気を付けろよ」

「どつ気を付けるんだよ」

綾香に苦笑で返しながら、彼は理事長室のある校舎の方へと歩いて行く。

そんな優也を沙耶香たちは心配そうな表情で見送ったのだった……

4話「蒼野優也」終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389x/>

未来への道筋

2011年11月26日01時51分発行